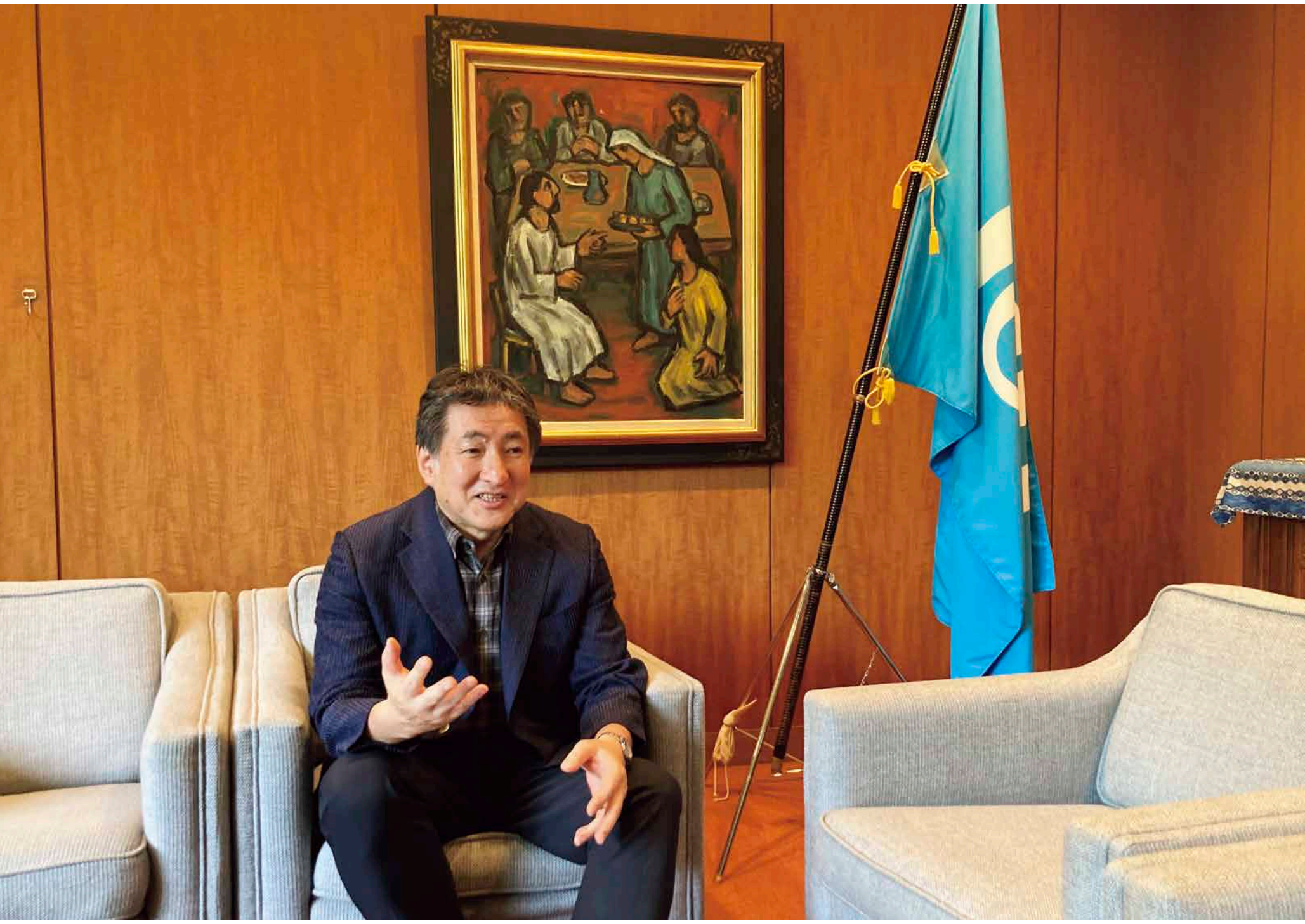
ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY
ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585
TEL&FAX : 0422 33 3320
https://www.icualumni.com/
E-mail : aaoffice@icualumni.com

ALUMNI NEWS
VOL.137 SEPT.2022

特集：ウクライナ学生受け入れ―― 大学の決断：p.2
小特集：学食から見るICUの歴史：p.6
DAY賞受賞者からのメッセージ：p.8
新しい同窓会体制：p.14
A_People 牧島かれん氏：p.15
Think globally, act locally. 山内健司氏：p.16
お邪魔します！ あのメジャー 大川洋教授：p.20



特集

ウクライナ学生受け入れ ―― 大学の決断

世界を震撼させたロシアによるウクライナ侵攻。
国外へ避難した人は推定900万人を超える（国連UNHCR協会、2022年7月時点）という未曾有の危機は、
終結の見通しも立たないまま長期化の様相を呈している。
ICUはいち早くこの侵攻に反対する声明を発表するとともに、ウクライナ学生を受け入れると決定。
5月から5人の学生が大学の寮で聴講生として生活をスタートさせた。
そこに至るまで、どのような検討と決断があったのか。

文・写真　新村敏雄、太田順子（本誌）

2022年５月20日、大学のアラムナイハウスで、ICUに入学した５人のウクライナ学生を歓迎する集まりが開かれた。18歳以上の成人男性は出国が制限されていることもあり、全員が女性だ。１週間前にポーランドから日本に到着したばかりで、今回の軍事侵攻後、日本の大学では日本経済大学（福岡）に次ぎ、最も早期に受け入れたウクライナ学生となった。参加した関係者によれば、「少し緊張気味で疲れているような様子も見受けられましたが、ウクライナの大学では何を学んでいたのか、なぜ日本に興味をもったのか、など話している際は笑顔も見せてくれ、楽しく話せました」という。

「軍事侵攻に反対する」との岩切正一郎学長（写真上）の声明が公表されたのが２月28日。ウクライナ学生受け入れの話が動き始めたのは、３月に入ってまもなくのことだった。声明公表後、岩切学長と日本国際基督教大学財団（JICUF）との間で「何かやれることがあるのでは」とお互いに声をかけあったという。

そこからウクライナ学生の募集を始めるまでには、３週間ほどしかかかっていない。３月22日には大学、JICUFと、難民支援団体のパスウェイズ・ジャパン（以下、PJ）の３者が共同でウクライナ学生受け入れプログラム「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」の開始を発表した。入学を希望する学生の募集が始まり、４月３日には受付が締め切られた。

JICUFは難民学生を高等教育機関に送る事業で実績がある。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と共催で2018年12月と2019年４月に難民学生への教育をテーマにシンポジウムを開催した（19年４月はICUで開催）。

今回迅速な動きが可能だったのは、JICUF、大学、PJが、2018年から共同で始めたシリア難民の学生に対する奨学金制度（シリア人学生イニシアチブ、以下SSI）の経験があるからだ（当時はPJではなく難民支援協会）。2011年の内戦勃発以来、シリアを逃れた難民は、2018年末までに670万人に達した。JICUFはICUと難民支援協会と提携し、SSIを設立。トルコに居住するシリア人の若者に４年間ICUで学部

教育を受ける機会を提供するもので、2018 年９月に２名、2019 年９月にも２名のシリア人学生を受け入れた。コロナ禍での渡航制限で入国できなかった 2020 年、2021 年の奨学生は 22 年春にようやく来日、９月にもさらに１人が入学の予定だ。

役割分担

３者の間では以下のような役割分担がされた。

まず、大学は受け入れ体制の準備。コロナで足止めされていた外国人学生の受け入れが 2022 年春頃からようやく始まったことで、大学寮の空きからウクライナ学生用に確保できたのは最大５人分。これが受け入れ枠の人数になった。

通常の留学生受け入れとは異なるため、学業、生活、経済的支援、支援の原資となる募金活動などの担当からなる少人数のサポートチームを結成した。ウクライナ学生受け入れプログラム全体のファシリテーターは、政治学・国際関係学デパートメント長のヴィルヘルム・フォッセ教授で、学生の選抜や学務面のアドバイザーを受け持つ。生活面の担当は木部尚志学生部長、マーク・ウィリアムズ国際学術交流副学長と加藤恵津子前学生部長。加藤前学生部長は今年度はリーブだが、旧ソ連からの帰国生というバックグラウンドからチームへの参加が決まったという。募金は富岡徹郎常務理事。さらに事務局やカウンセリングセンターからもメンバーが出された。

４月からは、これまで自然災害などで被災した学生を対象としてきた支援募金を、ウクライナからの学生向けも含めて呼びかけを開始した。受け入れる学生の寮費や聴講生として必要な費用にあてるもので、「すでに 300 万円を超える額が寄せられました」(岩切学長、取材時点）という。近隣住民から「５人ぐらいなら住める住宅を提供したい」との申し出もあったそうだ。

JICUF は独自の寄付プログラムを３月に開始し、渡航費、学費、生活費などの財源となっている。夏期日本語教育の費用も JICUF が持つ。中には、ICU と直接関係はない（卒業生ではない、など）三鷹市民からの募金もあったという。生活費の一部については資生堂も提供を申し出た。

日本に行きたい学生を探す調査も JICUF が担当した。ウクライナは旧ソ連時代には日本語教育の中心で、キーウのほか、オデーサ、ハルキウ、ドニプロなど地方都市の大学にも日本語教育プログラムがある。JICUF はキーウのウクライナ日本センターに国際交流基金から派遣され日本語を教えていた講師の方につてがあり、そこから各大学に接触できた。「どの大学もおおむね好意的な回答で、なかにはアンケートをとってくれた先生もおられ、最終的に 68 名の応募がありました」（髙田亜樹 JICUF 副代表、35 ID91)。

選考には、髙田さんや PJ 代表理事の折居徳正さん（35 ID91)、フォッセ教授など５人のメンバーが関わり、書類選考で 10 名程度に絞ったのち、１人 30 分程度の面接を経て５人が決まった。

受け入れる学生の条件は、「日本語や日本文化に関心があり、大学で学習していること」とされたが、面接を担当したフォッセ教授によれば、「日本語を１年以上学習しているかをひとつの基準とし、書類選考を経て面接に進んだ学生とは、面接のうち 10 分程度は日本語で行いました」という。それでも日本語のレベルはそれなりに個人差があり、入学した５人には「ICU の日本語の授業は、これまでとはちょっと違いますよ、と伝えました」という。学生たちの出身地はウクライナの各地に散らばり、自宅ではロシア語を話す学生もいるなど、育った背景も一様ではない。

ウクライナ学生の身分は、到着したのが新学期が始まってすでに２か月ほど経過した５月下旬だったため、春学期は聴講生となった。夏休みの間は夏期日本語教育を受け、秋学期以降は単位を取得できる科目等履修生となる。23 年度は、入学選考を受けて ICU に編入したり、他大学へ進学するなど、各自の希望に合わせた選択が可能だ。

PJ は学生たちを日本まで連れてくるための支援を担当した。面接で入学が決まった学生の何人かは、すでにウクライナからチェコやドイツに避難していたが、ゴールデンウィークごろにポーランドのワルシャワに集合。PJ のサポートを受けて日本大使館にビザを申請し、準備が整ったところで日本へ出発した。５月 14 日に成田到着後、コロナ感染対策としてまず都内のホテルで３日の隔離期間を過ごした。

PJ ではホテル滞在中も、日本社会で暮らすうえでの現実の厳しさや直面するであろう課題について、５日間のオリエンテーションを実施した。オリエンテーションには、在日ウクライナコミュニティである日本ウクライナ友好協会（KRAIANY）も参加したという。

きめ細かな学生ボランティアのサポートも

日本語がある程度理解でき、話せても、いきなり日本での生活に順応するのは容易ではない。大学のサポートチームも、学生ひとりひとりのニーズに対応するのは物理的に無理だ。そこを埋めているのが、在校生のボランティアグループ「留学生サポートボランティア（仮称)」だ。

「留学生サポートボランティア」の母体は、前述の「SSI」が開始された際、その制度で来日するシリア人学生に対して市役所等での各種手続きをサポートする学生により創設された「中東・中央アジア研究会」（以下、研究会、現在は大学公認サークル)。ここ数年は同研究会がその活動の延長としてボランティアも行っており、30 人ほどの学生が所属する。

研究会の代表で、ボランティアグループの学生コーディネーターでもある平田ひかりさん（ID25）によると、今春、JICUF の髙田さんからの依頼があり、グループを正式な団体としていくこととなったという（現在設立途中)。「これまではシリアの学生のみを支援対象としていましたが、ウクライナの学生も対象に加わったことを機に、今後は国籍を問わず留学生をサポートする団体となっていければと思っています」(平田さん)。

団体の活動内容は以下のようなものだ。

- 空港・あるいは滞在先ホテルから ICU キャンパスまで同行
- 住民票登録・健康保険加入・年金免除手続き等を留学生が行う際の三鷹市役所までの同行
- 銀行口座開設同行
- 携帯ショップでの SIM カード購入同行
- 大学での歓迎会の開催
- ハラールフードが購入できるスーパーや、日用品などを購入できる店舗など、キャンパス周辺の案内

SIM カード購入は、契約可能な携帯キャリアが限られている一方、留学生ごとに希望もあり、言葉の問題もあるため学生の同行がないときわめてハードルが高い。「今春サポートした際は、満足いくまで検討してもらいました」(平田さん)。

平田さんたちのグループは学生がキャンパスに到着した 10 日後の５月 30 日に、シリア人学生２人、ウクライナ学生５人の合同歓迎会を日没後のバカ山で開いた。留学生の自己紹介のあと、お互いの距離が縮まるようなゲームなどをしてリラックスした時間を過ごしたという。

広がる支援の輪

ICU が先鞭をつけたウクライナ学生支援の動きは、ICU の呼びかけで他の大学にも広がった。６月７日に JICUF と PJ が合同で開いた日本・ウクライナ大学パスウェイズに関する記者会見には、上智大学、龍谷大学、立教大学、東京女子大学、常盤大学など、ICU 以外に学生受け入れを表明した 15 大学のうち 13 大学の学長や国際交流担当責任者らが同席し、学生受け入れの方針を説明した（別表)。13 大学のうち８校は学長または総長が出席し、関心の高さがうかがえた。

会見で折居 PJ 代表理事は「大学は高等教育のみならず日本語教育の機会を提供するが、同時に、ネットワーキングの機会、住居、就職支援など、実は避難民が必要とするさまざまなリソースをもともと持っている場所であ

る。今回の 16 大学が、このプログラムに参加することで、避難民に対し、日本社会の中にあるリソースを提供し、安全に、可能性を活かす場を提供することになると考える」とプログラムの意義を語った。

大学パスウェイズプログラムのスケジュール（ICU と上智以外の大学）

６月 10 日　募集開始～ 24 日
６月下旬～７月上旬
　PJ ＋ JICUF による一次審査
　→各大学へ推薦
７月上旬～下旬
　各大学による二次審査
７月下旬
　結果通知、誓約書への署名等の手続
８月上旬　ビザ申請
８月中　渡航来日
８月下旬
　来日後のオリエンテーション
９月　受講開始

（大学パスウェイズプログラムとは別に、日本語学校パスウェイズプログラムがあり、2022 年３月 23 日時点で、全国各地の日本語学校 11 校がウクライナ学生の受け入れを表明している。受け入れが決まった学生は、提携校に入学し、１年半から２年間の日本語コースを受講する）

新しい枠組みの模索

６月７日の会見では「なぜウクライナだけなのか。アフガニスタン、ミャンマー、シリア等、ほかの紛争地域からの学生の受け入れについてはどのようにお考えか」との質問が出た。これに対しては、立教大学の西原廉太総長は「これまでは本学も難民・避難民を受け入れる枠組みを持っていなかった。今回は、ICU からの呼びかけもあったが、何よりも日本政府が前向きに積極的に動いたことが、積極的な受け入れを可能にした面がある。今後は本学もウクライナに限らず、他地域からの学生も受け入れていきたい」と回答した。

ICU では、SSI のプログラムで最初に ICU に入学した学生がこの６月に卒業した一方、新たなシリア人学生の受け入れは 22 年度が最終年度の予定。SSI が終了する一方で、ウクライナからの受け入れが始まったところだが、岩切学長は「今後は国籍を限定しない支援プログラムを検討したい」と話した。受け入れる学生数や時期など詳細は検討段階だという。

難民の場合、パスポートを持っているか、といった点も困難なケースが想定される。さらに、日本に滞在し続けようと思ったら、学位取得後順調に就職や進学（大学院）が決まり、就労ビザや学生ビザが取得できることが必要であり、課題は多い。

会見に出席した大学の受け入れに関するコメント

大学名	受け入れ人数	開始時期・期間	当初の身分	居住環境	経済支援
上智大学	10 名を上限	23 年春学期まで	non-degree生	学生寮	準備中
大東文化大学	２名		聴講生	交流生寮	卒業まで受験料・授業料免除
フェリス女学院大学	最大２名		科目等履修生	学生交流会館	月８万円程度の生活費の給付型奨学金
関西国際大学	２名程度		科目履修生		
明治大学	最大10名程度	2022年度の秋学期から2023年春学期までの１年間	科目等履修生	大学所有の家具付き寮室	学費等の免除、渡航費や生活費の支給
武蔵野大学	２名	半年または１年間	非正規学生		渡航費、学習、住居等
立教大学	９月に５名ほど、最大10名	2022年９月から原則として１年間	特別外国人学生（科目を履修し、単位を取得できる）	大学保有住居	渡航費、聴講料、月７万円程度の生活費など
龍谷大学	10名上限（協定校であるキーウ大学からすでに１名を受け入れ済み）		留学生別科	市営住宅	生活費支援、受験料・入学金・授業料免除
創価大学	最大５名	１年間	別科特別履修課程	寮	渡航費、学費、寮費、月８万円の給付型奨学金
テンプル大学ジャパンキャンパス	最大10名	１年間の予定だが、事情によっては延長も可能	単位取得が可能		日本への渡航費、学費、住居、毎月８万円の生活費を支給。
常磐大学	２名	最長で４年		寮	授業料および寮費を免除。寮に併設する食堂で食事の無償提供。月４万円の奨学金給付。
東京女子大学	３名	９月から１年半	科目等履修生	寮	月７万円の生活費、学費等諸費用、日本への渡航費など
早稲田大学	５名		まず非正規生として日本語を学ぶ		
慶応義塾大学	５名				
関西大学*	３名				
関西外国語大学*	２名				
文京学院大学*	５名				

注：６月 24 日までに受け入れを表明した大学（会見が開かれた６月７日時点では ICU を含めて 15 大学。＊の大学はそれ以降の参加）。
受け入れの内容は６月７日の会見（13 大学が出席）をもとに作成。ICU、上智以外の大学は６月 10 日に募集を開始。

腰痛・頭痛・自律神経失調症を改善したいあなたへ

ICU卒業生の佃隆（44期ID00）とパートナーの佃美香が27年間運営しており、毎年1万人以上の方が来院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院には、ICU関係者の方が来院者の4割を占めています。当院では、関節の動きが鈍く神経の流れが悪くなっている箇所とあなたの症状との関連性を分析し、症状の原因を特定します。独自のつくだ式カイロプラクティックケアによる治療、「『姿勢の魔法』シャキーン!」メソッドによる知識、分子整合栄養医学による栄養の3本柱によって、症状改善だけでなく、姿勢矯正、ひいてはあなたの理想の暮らしを送る健康サポートをします。ICUとご縁のあるあなたのお役に立てましたら幸いです。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

お子様連れでも安心! キッズスペース完備しています!
ICU関係者の方来院多数!

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。 〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平嶺ビル301号室

tel **0800-888-4270** 受付時間 ▸ 8:30～20:00
web http://mitaka-chiro.com

当院院長佃隆は
▮1日3回で、ねこ背がよくなる「姿勢の魔法」シャキーン!
▮姿勢をよくすると、人生がきらめく!
の2冊を出版しております。

パスウェイズ・ジャパン代表理事　折居徳正さん　インタビュー

**パスウェイズ・ジャパンは、2021年設立の難民支援団体。
NPO難民支援協会の「シリア難民留学生受け入れ事業」を引き継ぎ、教育を通じて難民の新しい道を拓くことを目指して活動している。
ICUへの2018年以降のシリア人学生や、今年のウクライナ学生の受け入れにも携わった。
代表理事の折居徳正さんは、ICUの卒業生でもある。折居さんから、団体の活動内容や意義、折居さんご自身の経歴や思いなどをうかがった。**

文・写真：滝沢貴大（本誌）

ウクライナ学生の受け入れについて折居さんは、「今回は急募で、日本語を過去に学習したことがある人を募集した。多くは日本文化に関心がある若者だ。そういう意味では、戦争がきっかけだが、ICUに待避して勉強できる機会を得られたのは、彼らからしたら悲劇のなかで一筋の光りが見えた思いだと思う」と指摘。「彼らにはICUで自分の学びをしてもらいたいし、逆にICUでウクライナの文化などを発信して、相互に刺激を与えてほしい」

折居さん自身の話も聞いた。IDは91。人文科学専攻で、宗教や哲学を中心に学んでいたという。「キリスト教だけじゃなく、イスラーム教を始めとした他の宗教がどういう考えをしていて、それが文化、社会にどういう影響を与えているのかに関心があった」。卒業後は一般企業で働いたが、貧困や紛争の問題に関わりたいと思い、30歳を過ぎてから転職し、NGO団体へ。難民や自然災害への支援活動にあたったあと、難民支援協会へたどり着いた。「始めは国外で活動していたが、日本国内で何ができるかも考える必要があると思うようになった」。シリア人難民を数人しか受け入れない日本の現状への問題意識も大きかったという。その解決策の一つとして、パスウェイズ・ジャパンの進める留学生としての受け入れがある。「緊急に保護が必要な方は実際いて、そういう方は国が受け入れる必要があるが、そこは役割分担だ。自立可能な方々には、奨学金や就職の機会などを与えて、自力でつかみ取れるようにするのも手だ」

今回のロシアによるウクライナ侵攻について、改めて聞いた。「日本の難民受け入れにとっては、歴史的なことだと思う。過去にはインドシナ難民を受け入れたことがあったが、その後途絶えていた。今回は政府が舵を切り、避難民の生活支援金や就労などのサポートにまで踏み込んだ」と評価。一方で、「日本社会にはそもそも、移民を受け入れて、社会のなかに統合していく機能がほとんどない」と指摘。「そうした中で、教育機関が果たす役割は大きい。日本社会において、大学が率先して難民を受け入れ、社会のなかで二つの国をつなぐ存在として送り出すのは重要な役割だと思う」と期待を込める。ICUでの学びを始めたウクライナ学生に向けては、「日本社会とウクライナ人コミュニティをつなぐ貴重な存在になってほしい」とエールを送った。

資生堂　野田公一エグゼクティブオフィサー　インタビュー

**資生堂とICUは、ICUによるウクライナ学生受け入れプログラムに対して、
資生堂が各種支援を提供する合意書を締結した。その狙いや今後の展開について、担当の野田公一エグゼクティブオフィサーにお聞きした。**

文・写真：新村敏雄（本誌）

── 今回の合意はどう始まったのでしょうか。

野田：当社代表取締役社長 CEO の魚谷雅彦が、３月のテレビのニュースで ICU の受け入れプログラムの報道を見て注目していました。その後、魚谷が当社の社内研修企画でサポートをお願いしていた ICU の竹内弘高理事長にお会いする機会があり、「当社でできることがあればサポートさせていただきたい」とお伝えしたところ、岩切正一郎学長をご紹介いただいたのです。

ちなみに資生堂では、３月上旬に緊急支援として 100 万ユーロ（約１億３千万円）を UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じて、ウクライナ避難民の支援活動に寄付したほか、社員からの募金に会社が同額を拠出することで３月末には 6000 万円を UNHCR に寄付しました。

── 学生に対する具体的な支援の内容は。

野田：日本に来るための渡航費や入国にあたっての PCR 検査費用などは、UNHCR や今回のウクライナ学生受け入れプログラム「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」を展開するパスウェイズ・ジャパン（PJ）を通じて提供しました。また、ICU と共同で、ICU が受け入れたウクライナ学生５人の生活費の一部の支給と、学費の一部の支援、資生堂グループ内のインターンシップやアルバイト機会の提供、ウクライナと日本の相互理解促進に向けた機会の提供（社員との交流イベント、資生堂グループの主催するイベントへの招待など）となります。

イベントでは、６月７日に「資生堂チャリティーコンサート“MUSIC for PEACE”」を開催し、その収益金から 2,290 万円を、PJ に寄付しました。

ICU の学生向けとは異なりますが、当社の茨木工場（大阪府茨木市）で、６月からウクライナ避難民の方２人をアルバイトとして採用しました。

── 今後の展望をお聞かせください。

野田：インターンシップやアルバイトなどについては今後具体化していきますが、近く ICU を訪問し、ウクライナの学生の方々がどんなお気持ちで日々過ごしているのか、今後のキャリアや夢などについてお聞きできたら、と考えています。今回 ICU に来られた学生の皆さんは将来グローバルに活躍される人材になると思っており、私たちも中長期のサポートを期待されていると認識しています。

小特集　学食から見るICUの歴史

インタビュー「塩田さんと”ガッキ”」

1955年1月に開設してから67年の歴史があるICU食堂。ICU食堂は現在、学生の間では“ガッキ”の愛称（一説では学生キッチンの略）で親しまれている。この“ガッキ”を中冨商事と東京ケータリングが運営した期間に勤務していた塩田和子さんが、この2022年3月に退職した。長年のICU食堂勤務の思い出を伺うべく、6月3日にアラムナイラウンジでお話を聞いた。

文：川島美菜（本誌）　写真：森川園子（44 ID00）、川島美菜（本誌）

―― ICU食堂には何年間お勤めになったのでしょうか。

塩田：43歳の時に中冨食堂に事務として入社しました。そこから勤務が始まって、今年70歳になるからICU食堂には26年間勤務したことになります。

今回、運営会社が交代してもICU食堂に残るようにとICUからはお話をいただき有難いと思いましたが、今までと同じようにはできないと思い、これを機にやめることにしました。

2022年３月８日が最終営業日で15日が最終出勤日でしたが、その日に向けて今までの卒業生たちが駆けつけてくれて、最終出勤日は花に囲まれていました。洗い場でバイトをしていた卒業生たちもたくさん会いに来てくれました。多くの人たちが駆け付けてくださって、私は何もしていないのに、ありがたいことです。

―― ICU食堂に勤務していた間の思い出をお聞かせください。

塩田：学生とは食堂のおばちゃんとして関わるようにしており、こちらから学生の事情に踏み込むことはしないと決めていました。ただ、学生が話したいことは聞くようにしていました。

入学してきた頃はICUの雰囲気とは違っていた子も、卒業するとICU生になっていくと感じて見ていました。

ツケ払いをしている学生もいましたが、私の前任の飯島元子さん（中冨商事）には「ある程度で払うようにしないと払えなくなってしまう。そうなる前に払うように言うのが優しさ」と言われており、タイミングや学生の様子を見ながら声をかけていました。

中冨商事の頃は、ICUに限らず、ルーテルや神学大、中東文化センターへお弁当の配達やパーティーでの出張もしていました。

2008年６月に旧ICU食堂が閉まった時も卒業生をはじめとした多くの方が食堂に訪れ、最終営業日にはスタッフはずっと花を貰っているだけのような一日でした。

2010年のダイアログハウスに食堂が移るまでの仮設食堂の頃は、第２教育研究棟（ERBⅡ）へ行く機会が多く、ジェンダー研究センターの人たちと知り合いになりました。

ダイアログハウスは、土器の出土の可能性が無いという理由で、旧ICU食堂を壊してその土地に建てることになったと聞きました。とてもICUらしいエピソードだと思って当時聞いたことを覚えています。

ダイアログハウスでの食堂の営業が始まり運営が東京ケータリングになると勤務が増えました。その時に、当時の大学運営の方針もあり、ICU食堂では朝食の提供も開始しました。営業時間が朝の８時から夜の20時までになり、勤務時間が長くなり大変でした。

大学の先生や学生の他にも、ICU教会の教会員さんたちには毎週食堂を利用していただき、良くしてもらいました。

ICU食堂で勤務して一番自分が変わったと思ったのは、人を見た目で判断しなくなったことかな。

学生、パートさん、職員、先生、その先生のご家族といった多くの人たちと出会い、ICUに縁を繋いでもらったと思っています。

―― パーティーのお仕事も担当されていたと聞いています。ICU食堂でのパーティーの思い出をお聞かせください。

塩田：事務職で入社したのにパーティー担当になったのは、結婚式の担当に指名されたことがきっかけでした。担当した第１回の結婚式は、その時の食堂のパートさんのご子息の結婚式でした。一番良いコース料理を発注してもらえて自信がつきました。

元々は事務職で入社したのでパーティーの配膳や立ち居振る舞いは自分でも外に勉強しに行ったりしつつ、ICU食堂でのパーティー担当の経験を重ねていきました。そのうち、「塩田さんに任せておけば大丈夫」と言ってもらえることもあるようになって、嬉しかったです。

旧食堂の頃のICUの結婚式は学生結婚や卒業してすぐに結婚式を挙げるカップルも多く、お金が無くても工夫してパーティーをしていました。

私が担当する結婚式では新郎新婦の２人には「ICUの学校に入ってきたらみんなが気に入るから。ICUのキャンパスと２人が素敵だから大丈夫」と言っていました。肩肘を張らずに、学生時代の馴染みの食堂のおばちゃんと結婚パーティーを作ろうと話し、カップルと私とで料理の内容を一から決めたりもしました。

旧食堂での結婚式では、イーストルームを使ってなんとか着替えをしたり、結婚式から披露宴、二次会、三次会までICU食堂でやったりしたこともあります。

私は、ICU食堂の結婚式で、音楽を自分たちで演奏して、参加する人たちが音楽に合わせて踊る、そういう雰囲気が好きでした。

結婚式以外でも、先生方の学会後の懇親会、お別れの会、卒業生の期会といったパーティーも担当しました。

開催場所は食堂以外でもアラムナイハウスや湯浅八郎記念館で開催されたパーティーもありました。

―― ICU食堂を退職してから２ヶ月が経ちました。今、ICU食堂での勤務を振り返って思うことは何でしょうか。

塩田：退職を決めた頃は、退職してしまったら自分がどうなるかと思っていましたが、実際に退職すると、今が楽しいです。ICUロスみたいなものは無く、やりきった感があります。

私が勤めていた頃のICU食堂はアナログな学生との関わりがあったと思っています。

自分が働いていた環境や働き方を美談にするつもりは全然なくて、働く方は管理されていた方が良い。だから今の食堂で良くなったと思います。

高校の食堂も東京ケータリングの頃に比べて今はIT化が進んだと聞いています。高校生なんて一番食が大切な時期だから、ちゃんとそのあたりが管理できる会社になって良かったと思っています。

働くうえで一番大切にしていたことは、「いくら学生でもお客さん」ということ。

ICUが繋いでくれた縁とその積み重ねが最終日に花に囲まれることに繋がったんじゃないのかな、と今は思っています。

料理提供カウンターとベーカリーカウンター

テイクアウトの丼ものとサラダ

券売機とその日のメニューが
掲載されるデジタルサイネージ

学食から見るICUの歴史

大学食堂の運営会社の交代

- 2022年４月ICU食堂の運営会社が東京ケータリング株式会社から交代し、エームサービス株式会社の運営になった。
- 運営開始初日2022年春学期授業開始日直後の平日４月11日にはダイアログハウスの外まで学食利用希望者の列が形成された。
- 東京ケータリング運営時から内装に大きな変化はないものの、レジ周りがリニューアルしたり、メニュー受け取り口にアイコンが設置されたりしている。
- 食券販売機の横のデジタルサイネージに日々のメニューが掲示されており、メニューは月替わりのイベントも行われている（写真は一例。４月５月６月に実施されたもの）。
- 昼食の提供のほか、カフェやベーカリーも展開している。
- エームサービスが運営するICU食堂の情報は外部向けWebサイトも開設されており、卒業生でもその日のメニュー等を見ることができる。https://www.aim-kenko.jp/0002240
- 2022年春学期から三省堂ICU書店は閉店し、ディッフェンドルファー記念館西棟の１階にKioskが入っているのみとなったが、このKioskもエームサービスが運営している。

6月8日のメニュー

ICUの大学食堂の始まり

- 1953年の国際基督教大学献学の後、大学食堂の建物は1955年に完成している。
- それまでは学生の昼食は弁当持参か大学本館での出張販売があったようである。
- 1960年か1963年には中冨商事が請け負い業者となっている。
- その後、少なくとも1963年以降は2008年までICU食堂の運営は中冨商事が請け負っていた。
- 開業当時のメニューはサーモンクレオール、魚アングレーズ、ポークロースミラノ風、チキンコルドンブルーなど本格フレンチのレシピに従ったものだったようである。
- 国際基督教大学名誉教授の武田清子先生の『未来をきり拓く大学—国際基督教大学五十年の理念と軌跡—』（国際基督教大学出版局、2000年）によると、ICU食堂は1955年１月11日に開設し、1960年４月１日に食堂を大学直営からYMCA食堂への委託に切り替え、と記されている。
- その後、2010年のダイアログハウスが建設され、ICU食堂のリニューアルオープンと共に東京ケータリングの運営となった。
- 最初にICU食堂を運営していた中冨商事は現在でも國学院高校食堂やレストラン神田仏蘭西料理　聖橋亭を営業している。
- 学食の営業を委託するにあたりICUのポリシーが影響していたかは不明であるが、前述の武田の著作によれば、ICU食堂はYMCA食堂に委託されており、1949年のICU創立にかかわる御殿場会議はYMCA東山荘で行われたなど、創業当時のICU食堂は、ICUとの縁が浅くはない業者に委託されたことは伺えるだろう。
- 2008年に取り壊しとなった旧ICU食堂の閉店時に卒業生の軍司葉子さんが作成したビデオDVD『さよなら学食』は現在ICUアーカイブスに所蔵している。
- 本誌アラムナイニュースでも既刊号110号、115号、130号と３回の食堂に関する記事を掲載しており、2008年秋刊行の110号では、「Good-bye, ICU食堂！」と題して、卒業生が主催したICU食堂への感謝を送るイベントの様子を報告している。

4月、5月、6月のイベントメニュー

DAY賞受賞者からのメッセージ

2022年のDAY賞を受賞した6人から同窓生へのメッセージをお届けします。

翻訳：鈴木律（本誌）　写真：八藤まなみ（本誌）

並木浩一氏（2 人文科学科卒）

NAMIKI, Koichi (CLA2, Humanities)

ICU名誉教授。日本で最も尊敬され、功成り遂げた神学者の一人であるだけでなく、聖職あるいは慈善事業、又はミッションスクールに奉職している多くのICU卒業生のメンターでもある。近年の著作は「ヨブ記注解」を始めとする旧約聖書を中心とするものであり、その活動はICUでの講義、論文発表、チャペルアワー説教に留まらず、学外での講演、シンポジウム、教会説教に及ぶ。氏のユニークな神学が、広く社会学、人文科学、詩学、日本学にまでも包含するのは、ICUでのリベラルアーツに根ざすからであろう。

Known as one of the most revered and accomplished theologists in Japan. He also plays a role as the mentor for ICU alumni engaged in missionary, social works, and education at various Christian institutions. His current literary works include "A Commentary on the Book of Job" and a series of authorship of the Old Testament. His accomplishment is not limited to the publication of numerous dissertations, teaching, preaching, and missionary activities at ICU but also extends to the lectures, symposiums, and preaching at churches outside of ICU. His unique scope of theological academism embraces sociology, politics, humanities, poetry, and Japanology which might have stemmed from the "liberal arts" nurtured at ICU.

68年前に私はICUに入学しましたが、それは家業を継ぐことを４年延ばしただけでした。４年生になると、その１年が学問と付き合える唯一のチャンスだと認識し、当時、新約学の先端を走っていたドイツ語文献との取り組みに熱中しました。卒業後、私は父との約束で１年近く家業に就きましたが、気乗りのしない仕事への従事は自分にも周囲にもよくないと見極めて家を出て、東京教育大学大学院の倫理学科に入学しました。しかし直ぐに倫理学の限界を悟って旧約学へと転向し、以後、今日まで旧約学を専門としています。当時、私は言語学科の教員であった関根正雄教授に個人的に師事しましたが、その傍ら、学問とは結局自分で開拓するものだと自覚しました。

聖書学は専門的叙述によっては現代性を持ち得ません。昨年に刊行した『ヨブ記注解』は注解の仕事に終始せず、現代の問題に人類がどう対処すべきかの課題に注意を払いました。誰かが、これはリベラルアーツの視点からのヨブ記注解だと評するならば、私は喜んで同意します。人類的な関心を専門分野での研究に活かすのは楽ではありませんが、文化形成への参与には不可欠です。私は初期のICUで教えたブリン・ジョンズ先生による激励“Pioneer, O Pioneer!”を今なお忘れることができません。リベラルアーツの感覚をICUで養ったことは私の貴重な財産です。

私は自分の学問形成が不確かな時期から国内の幾つもの学会の実務の仕事や運営を担い、諸教会の支援や教区の研修会にも関わってきました。しかし当然ながら私の最大の仕事はICUでの教育活動でした。私が教えたというよりも、学生諸君と一緒に学んだと言うべきでしょう。教室の外の活動では、ICU生、東京神学大学の学生と牧師たちを交えた毎夏の合宿が有意義でした。

教授会成員としての私の仕事から選択すれば、大学院比較文化研究科で学生たちの関心を拡げたこと、ICUのキリスト教理念検討委員会の報告書を作成し、Issues of ICUシリーズに採択された二つの冊子を執筆したことが重要でしょう。私はその仕事の中で、ICUでキリスト者教員と非キリスト者教員が一緒に働くための共通理解として５点を指摘しました。中でも、マイノリティであることを引き受けることの合意は最も実践的な項目です。これはICUを卒業する学生たちには今も、今後も重要な信念であると、私は信じています。

The purpose of entering ICU 68 years ago was to delay succeeding to the family business by four years. In my senior year, I realized that this was my one and only chance to apply my mind to learning and engrossed myself in reading the literature in the original language from Germany, which was at the vanguard of New Testament studies at that time. On graduation, I worked in the family business for nearly a year as promised to my father, but I realized that my half-hearted attitude would serve neither myself or the company. I returned to academic life at the Tokyo University of Education. However, I felt the limitations of Ethics and converted to Old Testament studies, which has been my research area ever since. At that time, although Professor Masao Sekine of the Linguistics Department mentored me personally, I realized that scholarship is something one has to trail-blaze.

No expert's narrative can infuse modernity into Bible Studies. Rather than focusing on annotation in "A Commentary on the Book of Job", published last year, I drew attention to the problems now faced by humankind. If a reviewer were to note that this annotation for the Book of Job was written from a Liberal Arts perspective, I would agree wholeheartedly. It is not easy to think about humanity's concerns in my research area, but it is essential to take part in cultural formation. I cannot forget the words of encouragement "Pioneer, O Pioneer!" of Professor Brin Jones, who taught in the early days of the University. The sensibility to Liberal Arts inculcated in me at ICU remains a most valuable treasure.

Even when uncertain about how to advance my scholarship, I engaged in the practical management and operation of many academic societies in Japan, and also assisting churches and parish seminars. However, my main work naturally was to teach at ICU, which was not a one-way street, but rather I learned together with my students. The most meaningful extracurricular activity was the training camp every summer with the participation of ICU students and the Tokyo Union Theological Seminary students.

If I were to select the most important achievements as a faculty ICU, it would be to have widened the interest of students in the Graduate School Department of Comparative Culture, compiled the report for the Committee for the Study of ICU's Christian Ideals and written two booklets which were designated as part of the Issues of ICU Series. In that work, I stipulated five points of common understanding to promote co-operation between Christian and non-Christian faculty. The most practical amongst all the elements is to agree and accept that we are a minority. It is my belief that this is an important conviction now and in the future for students graduating from ICU.

東哲郎氏（16 社会科学科卒）

HIGASHI, Tetsuro (CLA16, SS)

元東京エレクトロン（株）会長・社長。ICU時代は哲学、経済史を主に学び、ICU卒業後は東京都立大学大学院（日本経済史）へ進学､研究者を志す。しかし、４年間大学院に在籍後、27歳で当時のベンチャー企業である東京エレクトロン（株）に入社。46歳で社長に抜擢され、同社を世界的半導体製造装置メーカーへと大きく成長させた。他に日本並びに世界の業界団体会長を務めるとともに、経産省の半導体・デジタル産業戦略検討会議座長等を歴任。2020年春の叙勲で旭日重光章を受賞。2021年４月には日本経済新聞『私の履歴書』を同窓生として初めて執筆した。

この度のDAY賞受賞に際し、関係者の皆様に御礼申し上げます。突然のことで、私自身、大学の知名度、魅力度を上げることに、それほど貢献したとは思っていませんでしたが、私が好きなICUが選んでくれたこと、素直に喜んで、いただくことにしました。

私の家は、井の頭公園のすぐ南側にあり、買い物等、ちょっと出かけるとなると、必ず公園を横切り池の七井橋を渡ることになります。先日１月末、寒い冬の合間にポカポカした陽気となり、妻と買い物ついでに公園を、散歩したら、今年初めて、梅の木が白と赤一本ずつ花を咲かせていました。あまりいいニュースを聞かない昨今ですが、自然は春に向かって準備を始めていました。その後池に沿って歩いていくと、例年よりかなり多い数の水鳥が、池に浮かび、気持ちよさそうに日向ぼっこをしていたり、あるペアーは頭を池に突っ込み、おしりを垂直に空に向けて、昼食用の餌探しをしていました。武蔵野ののどかな風景のひとときでした。

わたしと武蔵野との出会いは、今から55年前、高校３年の時、友人と一緒に大学探しをかねて、ICUに見学に来たときにはじまります。それまでは、ICUも知らず、武蔵野にも馴染みのない私でした。富士重工前のバス停を降り、まっすぐの広い桜並木道を歩きキャンパスに着くと、今まで経験をしたことのない異次元の空間が広がっていました。正面の教会、左側雑木林の中の学生寮、右には芝生のくぼ地に立つ白い図書館、その奥には本館、その前には小さな丘とだだっ広い庭が芝生に覆われて広がっていました。暫く呆気にとられました。土曜日の午後、芝生にのんびりと座っている学生や、輪になってバレーボールをしているグループ、その中の半分は留学生で和気あいあいと楽しんでいました。ここは一体どこだ、何か時間の流れが止まったような感覚になりました。一瞬にしてこの大学に強く惹かれました。その後の人生を振り返ると、ここが私の分かれ目だったように思います。

Former Chairman and President of Tokyo Electron Limited. During the ICU era, he mainly studied philosophy and economic history, and after graduating from ICU went on to graduate school at Tokyo Metropolitan University (Japanese economic history) and aspired to be a researcher. However, after enrolling in graduate school for four years, he joined Tokyo Electron Limited, a venture company at the time, at the age of 27. He was appointed president at the age of 46 and has grown the company into a global semiconductor manufacturing equipment manufacturer. In addition to serving as chairman of industry groups in Japan and around the world, he has also served as chairman of the Semiconductor and Digital Industry Strategy Review Conference of the Ministry of Economy, Trade and Industry. Awarded with the Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star in 2020. In April 2021, he was the first alum to write "My Personal History"(watashi no rirekisho) on the Nikkei Newspaper.

ICUそして武蔵野の地で育まれた人間関係と経験、友人との出会い、先生との出会い、そして妻との出会い、生きることへの向き合い方、さまざまなことが、この時代に凝縮され、ここから始まり、今に至っています。私の妻は大学は違いましたが、生まれた時から武蔵野で育ち、ICUにはよく遊びに来ていたとのこと。ICUの友人とともによく彼女の家に遊びに行きました。お母さんは非常に心の広い優しい人で、我々をいつでも受け入れてくれました。私にとってはヘルマン・ヘッセのデミアンに登場する不思議なお母さんのようなイメージでした。ICUの思い出と経験を綴ると枚挙にいとまがありません。

ICUの当時の友人や先輩そして先生とは今でも親交が続いています。私のアドバイザーをしていただいたギリシャ哲学の川田殖先生やトーマス・アクィナスの研究されていた岡野昌雄先生ともよくあっています。川田先生は90歳になりますが、佐久にある家にお邪魔すると、学生時代の講義の時のような声で、元気に話され、50年の歳月が一気に飛んで行ってしまいます。川田先生はICU創立の時の最初の学生でもあります。長くもあり、短くもあるICUの歴史は、このような人と人との積み重ねの上で形成されていくように思います。

ICUを卒業し、その後ICUで日本経済史の講義をされていた水沼知一先生を追うように、都立大大学院に進み、その後27歳で、東京エレクトロンに入社しました。今では半導体製造装置の世界的なメーカーとしてなくてはならない存在となりました。私が入社したときは社員が200人、平均年齢が28歳、経営陣は皆40歳前後の若い会社で、火の玉集団とも呼ばれ、日本の古い体質から解き放たれたエネルギーに満ちた会社でした。それから四十数年にわたり私は半導体産業に従事し、今に至っています。

DAY賞受賞のお礼を兼ねて、私のICUの思い出とその後の私について簡単に触れました。同窓会が、ICUの良き文化と風土をさらに築き、守っていってくださることを期待しています。

First, I would like to thank all involved for the Distinguished Alumni award. Despite not having done much to raise the visibility or appeal of the university, I was honestly overjoyed at the sudden news that my beloved ICU had chosen me and decided to accept this honor.

My house is located just south of Inokashira Park. I have to walk through the park and over the Nanai Bridge on the pond to reach the shops or anywhere. Earlier this year on a warm, sunny late-January day during a cold winter, my wife and I were strolling in the park to go shopping and saw two plum trees, one white and the other red, blooming with the first flowers of the season. In spite of the lack of good news nowadays, nature was making preparations for the spring. Afterwards, pacing along the pond, there were more waterbirds than usual, floating on the water and happily sunbathing. A pair of birds were feeding for their lunch upside down, heads in the water and tailends up in the air. This was one tranquil moment of Musashino.

My first encounter with Musashino was 55 years ago, when a friend and I searching for a university visited ICU in our last year of high school. I had neither heard about ICU nor was familiar with Musashino. Having alighted at the "Fuji Heavy Industries" bus stop, we walked along the cherry tree-lined wide, straight road to the campus. There before me was a surreal scene. In front was the chapel; to the left the dormitory half-hidden amongst the trees; to the right the white library building sunk in a grass-covered hollow, behind which was an acre-wide lawn area with little mounds and then the University Hall. I was dumbfounded. On that saturday afternoon, students were lounging on the green grass; a group in a circle was tossing a volleyball. All the students were smiling and enjoying themselves, perhaps half of whom were from overseas. What is this place? In that instant, when the flow of time had stopped, this university had bewitched me. Looking back on my life, this was the turning point.

My personal relationships and experience were originally nurtured at ICU and in Musashino. Encountering friends and professors, meeting my wife, learning how to face life and many other things started at that time in a concentrated way and have continued to the present. Although my wife studied at another university, she was born and bred in Musashino and often visited the campus. My ICU friends and I frequented her house. Her mother was a kind, broad-minded soul, who always welcomed us. For me, her image doubles with the mysterious Frau who appears in Hermann Hesse's "Demian." My memories of ICU are just too numerous to write up here.

I am still in contact with classmates, older friends and professors from my ICU days. I meet often with professor Shigeru Kawada, my advisor and Greek philosophy scholar and professor Masao Okano, a Thomas Aquinas researcher. On visiting his house in Saku, Nagano Prefecture, the former, a recent nonagenarian, talks in a vigorous voice just as he used to do back in school. I can feel the half century passage of time just glide away. Professor Kawada was one of the first batch to graduate from ICU. The history of ICU, whether one calls it long or short, will continue to be overlayed on the foundation of such people.

On graduating from ICU, I followed professor Tomokazu Mizunuma, who had lectured on Japanese economic history, to Tokyo Metropolitan University's graduate school. At the age of 27, I joined Tokyo Electron, which has grown to become a global and essential manufacturer of semiconductor production equipment. But when I joined the company, the headcount was 200, average age 28 and lead by fortyish executives. It was a young company, called by some as "ball of fire group" and filled with energy born out of its liberation from the shackles of Japan's ancient regime. For 40 odd years, I have been involved in the semiconductor industry.

In gratitude for the DAY award, I have briefly recollected on my days at ICU and my later life. It is my hope that the Alumni Association will further fortify and protect the wonderful culture and natural environment of ICU.

平井一夫氏（27 ID83 社会科学科卒）

HIRAI, Kazuo (CLA27, ID83, SS)

ICUで国際法を学び、1984年に卒業後CBS・ソニー（現 ソニー・ミュージックエンタテインメント）入社。1994年にソニーミュージックNYオフィス、その後ソニー・コンピュータエンタテインメント米国法人社長を経て、2007年ソニー・コンピュータエンタテインメント（現 ソニー・インタラクティブエンタテインメント）社長。2009年からソニー（現 ソニーグループ）EVP、2011年副社長、2012年からの社長兼CEO在任中に歴史的ターンアラウンドを実現。2018年会長、2019年よりソニーグループシニアアドバイザー。2021年『ソニー再生』刊行、全ての収益は子供の貧困や教育格差の解消のために自ら立ち上げた一般社団法人プロジェクト希望を通じて寄付される。ICU知名度向上、大学・同窓会活動にも大いに貢献。

Studied International Law at ICU. Joined CBS/Sony (now Sony Music Entertainment (Japan) Inc. (SMEJ)) after graduation. Moved to SMEJ's New York office in 1994. Appointed President and Chief Operating Officer of Sony Computer Entertainment America in 1999 and became President and Group Chief Operating Officer of Sony Computer Entertainment (Now Sony Interactive Entertainment) in 2006. In 2009, became EVP, Sony Corporation (Now Sony Group Corporation). After appointed Executive Deputy President in 2011, promoted to President and CEO in 2012 whereby achieving a historic turn around. He became Senior Advisor, Sony Group Corporation in 2019. Published "Recreating Sony" (tentative title in English) in 2021 and all proceeds will be donated through 'Project KIBO (Hope in English)', which was launched by himself to eliminate child poverty and educational disparities. Greatly contributed to increasing the ICU name recognition and actively contributed to ICU and Alumni Association activities.

2019年に会社を「卒業」して以来、私は様々な会社や団体、学校から数多くの講演依頼を頂く。講演のテーマは「企業再生のリーダーシップ」、「DX時代のリーダーシップ」、「事業改革のリーダーシップ」と「何々の」は違うものの常にリーダーシップ論についての講演内容になる。確かに官民を問わずほぼ毎日のようにマスコミでは「リーダーシップの弱さやその欠如」を指摘する記事や論調を目にする。自分の商売の（とは言っても講演料は全額寄付しているが）種明かしになってしまうが、実は「何々の」に依頼主が如何なるテーマを入れて来ても講演内容はほぼ同一で事足りてしまう。つまり、リーダーシップそのものはいかなる分野、場面、問題であってもその根本は変わらないのである。そしてリーダーシップ論と言えば、一般的にはいかにIQを高めるかが議論されるが、私が一番重視しているのはIQではなく、むしろEQ（心の知能指数）である。つまりいかにリーダーとして深い知識と多くの経験、戦略立案力や問題解決力が備わっていても、そもそも周りの人からリーダー以前に一人の人間として尊敬されていなければ本当の意味で組織は力を発揮できないのである。知識を高めるための勉強も大事だが、それよりもっと大事なのはEQをいかに高めるかである。

EQについては多数の書籍があるので詳しい説明は割愛するがempathy、つまり相手の立場になってその人の考え方や主張を理解、リスペクト出来るかが大事なポイントの一つになる。最近は「多様性」という言葉が様々な場面に登場するが、真に多様性を理解していなければempathyを感じることもできない。

ICUは私が学生だった1970年代後半、1980年代初めのころからあらゆる多様性がすでにbuilt-inされており、今から振り返ると素晴らしい教育環境がすでに構築されていたのだ。その多面的な多様性の中で培われたempathyが私のその後のキャリアで果たした役割は計り知れないほどに大きいものがあるのと同時に自分がいかに恵まれていたかを常に考える。

私の大好きなフレーズ「Let's agree to disagree」、この一言がいかに大きな世界への扉を開いてくれるか……これからもICUには高いIQのみならず高いEQも兼ね備えた学生を世界に輩出することを期待してやまない。

この度はDAY賞に選んで頂き本当に有難うございました！受賞者の名に恥じないように今後も精進するのみです。

Since my "graduation" from the Sony Group, various companies, organizations, and schools have requested lectures from me on many occasions. Be the title "Leadership for Corporate Revival", "Leadership in the DX Age", "Leadership for Business Transformation," or what it may, the main theme of the lecture is always leadership. It seems like every day that one sees articles and commentary in the media pointing out the weakness in leadership or lack thereof, be it about the Japanese government or the private sector. The real secret to my lecture business (which is non-profit, as I donate the honorarium) is that, regardless of what theme the organizer designates, my presentation is pretty much the same. That is to say, for any field, situation, or problem, the fundamentals of leadership are constant. To go deeper into discourses on leadership, general discussion tends to focus on how to improve IQ (intelligence quotient), but I put more weight on EQ (emotional quotient). Even if a leader possesses deep knowledge, abundant experience, strategy-making

skills, and problem-solving abilities, unless they are respected as a person by those to be led, the organization will not be able to exercise its potential. Studying to broaden one's knowledge is important, but even more so is to improve EQ.

Many books have been written on the subject of EQ, so I won't go into detail, but one of the most important elements is empathy – the ability to put oneself in another's shoes and understand and respect their way of thinking and their assertions. More recently, the term "diversity" appears frequently in all kinds of contexts. Truly, to feel empathy, one has to comprehend diversity.

By the time I studied at ICU during the late 70's and early 80's, a rich diversity had already been built in. Looking back, it was a spectacular educational environment. The empathy cultivated within that multi-faceted diversity played an immeasurably important role in my later career. It makes me reflect on how enriching it was there.

A beloved phrase of mine is "let's agree to disagree" – these words really open the door to a whole new world.

I ceaselessly hope that ICU will continue to equip its students with not only high IQ, but also EQ, and to see them onto the global stage.

Lastly, I would like to thank the Alumni Association for selecting me for the DAY Award! The best I can do is to diligently strive to live up to this honor.

井伊雅子氏（30 ID86 社会科学科卒）

II, Masako (CLA30, ID86, SS)

医療経済学者、一橋大学大学院国際・公共政策大学院教授。2005年から現職。アジア公共政策プログラム・ディレクターとしてアジアの若手官僚の育成に貢献してきた。質と財政の両立を計るプライマリ・ケアの構築や不確実性の下での医療に関する意思決定などを研究。コロナ禍で、感染対策に対応できるより良い医療制度構築に向けた提言などを積極的に発信。学外でも日本学術会議会員、NHK経営委員会委員、政府税制調査会委員などを歴任、多方面で活躍している。

Expert of Health Economics and Professor of Hitotsubashi University Graduate School of Economics. Also Director for Asian Public Policy Program, School of International and Public Policy. After ICU, she received Ph.D. in Economics at Wisconsin University Madison then joined the World Bank. Her main research subjects are primary care with a balance between quality of healthcare and budget allocation, and healthcare under uncertain circumstances. Since the Corona pandemic started, she has been proactively speaking out about a better medical care system to manage such situations. She is also active beyond academic areas, including being appointed to Government's tax commission member, member of Board of Governors for NHK etc.

大学に行くならばICUと思っていた高校生でした。高校１年生の山岳部の夏山合宿に同行した先輩（女性）がICU生でした。槍ヶ岳や穂高を縦走しながら、学生生活の話を聞いて、平凡でない学びができるのはICUだと確信したのでした。

ICUでは期待通りに、さまざまな出会いや学びがありました。国際機関で働く先輩たちや、国内外の著名な国際人の話を聞く機会が多くありました。一方で、そうした華やかな世界に憧れて入学した私には、思いがけない出会いもありました。良い本を出版しようと奔走している先輩、国内外の障害者や貧困者など困っている方たちのための活動をしている先輩たち。当時はまだ珍しかったそのような草の根の活動に従事している方たちの話を聞く機会がキャンパスの中で身近にありました。

日常でそのような刺激を受ける一方で、学問に対する好奇心と情熱をかき立てられる４年間でもありました。

１年生の英語の講義では、多岐にわたる分野のエッセイ、小説、論文を毎週大量に読み、英語で新しい知識を得る楽しさを覚えました。Leonard Bernsteinのエッセイを読んだときは、音楽好きな先生がキーボードを教室に持ち込んで解説をしてくれたこと、Steele先生の幕末の日本史の講義では、高校までの日本史と違う見方を学んだこと、スコットランドなまりの英語でPicken先生から哲学の講義を受けたこと、Betty Friedanの『Feminine Mystique』を読んだときには、英語よりもその背後にある思想が全く理解できず七転八倒、Graham Greeneの『第３の男』や、『炎のランナー』が課題図書になったときには、映画の力も借りたこと。ICUの英語教育では、音楽、絵画、宗教、現代思想などを学びながら色々な視点から物事を考えるトレーニングにもなりました。

英語の講義以外でも、当時の講義の内容は昨日のように思い浮かべることができます。自分の研究の面白さや素晴らしさを学生たちに伝えたくてたまらないという先生たちとの出会いがありました。斎藤和明先生の英文学、武田清子先生の日本の近現代の思想史、川島重成先生のギリシャ古典、古屋安雄先生のキリスト教概論、Kidder先生の西洋美術史、大塚久雄先生の西洋経済史などなど。一つ一つの講義のエピソードが思い浮かびます。受講していない講義からも学びました。２限の講義を受講するために教室に入ると１限の講義の熱気が教室に充満していて驚きました。井上和子先生の言語学概論の講義でした。

そしてクライマックスはICU二期生の雨宮健先生との出会いでした。スタンフォード大学からサバティカルで１年間ICUで講義を担当されました。当時の日本ではどの経済学部でも学ぶことのできない最先端の計量経済学と統計学をICUで学びました。米国の大学院に留学をすると、雨宮先生の教科書が全米のみならず、世界中で使われていることを知りました。そして、経済数学の教科書は、ICU一期生の高山晟先生の教科書が使われていました。誇らしく思いながら大学院での勉強に励んだことを思い出します。

最近話題の多様性、国際性は、40年前のICUではすでに当たり前のことでした。私の専門である医療経済学と医療政策は、経済的な側面だけでなく、倫理、文化、歴史などの洞察も不可欠です。夢中で様々な分野の本を読み、先生にたくさんの質問をし、学年を超えた仲間たちと議論して世の中のことをいろいろ考えた４年間でした。今回DAY賞受賞で、ICUでの多くの学びを振り返り、自分が受けた素晴らしい教育に改めて深く感謝をしています。

When I was a high school student, I really wanted to attend ICU.

Let me explain why.

When I was a high school student, I was fortunate enough to be able to take part in a summer mountaineering club excursion.

Our escort was an ICU student. She was so friendly, charming, and intelligent, and while we traversed Mount Hotaka and Yarigatake, she told me all about her campus life at ICU.

It sounded wonderful, and I was convinced that if I could attend ICU my education and experience would be extraordinary.

Indeed, I attended ICU and it met all my expectations. I was able to meet or hear directly from international civil servants and famous cosmopolitan alumni from both Japan and abroad.

I was, of course, yearning for a colorful and successful career.

However, on our campus, I was lucky enough to meet altruistic people who while toiling to publish research or works of excellence still found time to support disabled or destitute people both domestically and overseas.

At ICU, the opportunity to listen to people involved in such grassroots activities that were still novel at that time was always close by.

At the same time as being stirred daily in this way, my curiosity and passion for learning was greatly stimulated during my four wonderful years at ICU.

In Freshman English, I awoke to the joy of reading essays, novels, and theses every week and attaining new knowledge in English.

As some examples:

When we read about the conductor and composer Leonard Bernstein, our instructor, who loved music, brought along her electric piano to amplify her lecture.

In another class on the closing age of the Tokugawa Shogunate, Prof. William Steele taught us quite a different Japanese history than what we had learned in high school.

Prof. Stuart Picken, in his charming Scottish accent, talked to us about philosophy. When I read Betty Friedan's "Feminine Mystique," I struggled not with the English, but to fully grasp the ideological backdrop.

When Graham Greene's "The Third Man" or "Chariots of Fire" were put on the reading list, I relied on watching films.

Therefore, having learned about music, painting, religion, modern philosophy, and much more during my English language education at ICU, I was pre-trained to think about things from a multilateral perspective.

Apart from courses on English, I can clearly remember the other lectures as though they took place yesterday.

I met many professors who wanted to convey how exciting or wonderful their research was to their students. Some examples are:

Prof. Kazuaki Saito, English literature. Prof. Kiyoko Takeda, history of Japanese modern philosophical thought. Prof. Shigenari Kawashima, Greek classics. Prof. Yasuo Furuya, introduction to Christianity. Prof. Edward Kidder, Western art history. Prof. Hisao Otsuka, Western economic history.

There were many others.

I can also recall episodes from those lectures. I even learnt things from classes that I did not attend. As an example, I remember entering a hall at the end of the first morning class, and I could feel the fever and energy filling the air; Prof. Kazuko Inoue had just taught Introduction to Linguistics.

The climax at ICU was meeting in my last year Prof. Takeshi Amemiya, ICU alumnus who was taking a year-long sabbatical from Stanford University.

I was able to learn about the most advanced econometrics and statistics, which at that time, was not yet being taught at any other university in Japan.

On reaching graduate school in the United States, I found that Prof. Amemiya's textbook was used in the US and worldwide. Similarly, a mathematical economics textbook written by Prof. Akira Takayama, a member of ICU's inaugural class, was also required reading.

I remember feeling rather proud while devoting myself to my studies that diversity and an international mentality were already taken for granted at ICU 40 years ago. In health economics and health policy, which are my area of expertise, it is essential to make observations from economic, ethical, cultural, historical, and other points of view. During my four years, I read a wide range of books with absorbed interest, asked all my professors a great many questions, debated with both older and younger classmates, and thought through current issues.

In conclusion, on this occasion of accepting the DAY award and looking back on the many and diverse things I was able to learn at ICU, I would like to express my deep gratitude for the excellent education and life experiences that I had during my 4 years at ICU.

Thank you sincerely,

大久保真紀氏（30 ID86 語学科卒）
OOKUBO, Maki (CLA30, ID86, Language)

ジャーナリスト、朝日新聞編集委員。ICU卒業後、同社入社。中国残留日本人が歩んだ厳しい人生、虐待を受けた子どもたち、遺伝性難病の患者、性暴力の被害者、12歳で売春宿に売られてHIVに感染し、タイのNGOに保護された少女ら、「様々な社会的弱者の実態を長期間にわたって取材し、報じてきた」ことを高く評価され、2021年度の日本記者クラブ賞を受賞。1995年から受賞の日までに読者から届いた手紙が1554通ということから分かるように、それらの記事は読者の心に届き、大きな支持を得ている。

A journalist, Senior Staff Writer at the Asahi Shimbun Newspapers, the 2021 recipient of the Japan National Press Club Award, which is given to Japan's leading journalists. She was highly praised for her "long-term coverage and reporting on the realities of societies." Her coverage targets include the Japanese children and women left behind in China after WWII, abused children, patients with hereditary intractable diseases, victims of sexual violence, and girls sold to brothels at the age of 12, infected with HIV, and sheltered by a Thai NGO. As you see from the 1554 letters received from readers from 1995 to the date of the award, those articles have reached the hearts of readers and have received great support.

「すみません、何がおもしろいのですか？」勇気を振り絞って、隣の人に聞いたことをいまでもはっきりと覚えています。ICUに入学したばかりのとき。N館の当時一番大きかった大教室で、１年生全員がそろってのオリエンテーションだったかと思います。教壇でNon-Japaneseの先生が英語で何かを話しているのですが、私にはちんぷんかんぷん。ときおり、周囲の同級生たちがみな笑うのについて行けず、恥を忍んで隣の人に声を掛けたのでした。

「場違いな大学に、間違って入ってしまった」と焦りまくりました。そんな出来損ないのICU生だった私を、DAY賞に選んでいただき、心より感謝を申し上げます。

高校までは水泳競技に打ち込み、学校とプールを往復するだけ。インターハイや日本選手権に出るだけの選手でしたが、毎日計７～８キロメートルに及ぶ朝晩の練習でクタクタになり、英語の勉強はもちろん、読書をしたこともろくにありませんでした。そんな私にとって、ICUは自分がいかに何も知らないかを知る場となりました。学ぶ喜び、出会う喜び、知らない世界に足を踏み入れる喜び、挑戦する喜び。私の生きる世界を一気に広げてくれたのがICUでした。

花びらが散り始めた満開の桜に迎えられた入学式では、新入生一人ひとりの名前が呼ばれ、「世界人権宣言」に基づく誓約書に署名をしたことが深く心に刻まれました。当時は人権宣言がなんたるかはほとんど知りませんでしたが、一人ひとりが個として大事にされているという実感、「世界人権宣言」の宣誓という行為そのものが、その後の私の歩みに、影響を与えたと感じています。

漠然と英語が話せることへの憧れがあり、機会があって訪れたキャンパスに魅せられ、ICUを志望しました。通っていた関西のふつうの県立高校の同級生に「ICUに行く」と言うと、「外国の大学に行くの？」と言われ、「いえいえ、国際基督教大学」というと、「シスターになるの？」と聞き直されました。合格するわけがないと思っていたICUに入ることができたのですが、入学後に受けたカルチャーショックは、３年次に交換留学制度を利用して渡った米国・テネシー州立大学での初めての留学生活より、大きかったというのが正直なところです。

授業中に学生が足を組み、紙コップのコーヒーを飲みながら先生に質問をする姿、生徒が先生を評価するシステム、セクションメイトや先輩たちのキャラや言動、Non-Japaneseがたくさんいるキャンパス、多くの学生が利用していた図書館とD館、チャペルアワー……。「純ジャパ（純粋なJapanese）」で水泳の世界しか知らなかった私にとっては、見るもの、体験するものすべてが、さまざまな価値観との出会いであり、驚きの連続でした。

朝日新聞の記者になって34年が過ぎました。記者になりたいと思い定めて挑んだ就職活動も、１年目は朝日も含め受けた新聞社は最終面接ですべて落ち、卒論を出さずに学校に残りました。当時は、既卒になると女性は一般企業への就職が難しいと言われていたからです。親に反対されたため、５年目は毎日証券会社でアルバイトをして自分で学費を稼ぎ、留年しました。やるだけやってダメなら方向転換、と心に決めて挑んだ２年目に、なんとか朝日新聞に拾ってもらいました。足踏みをしたこの間は就職担当の職員の方に励ましていただきました。「本当に自分は新聞記者になりたいのか」と自問し続けた１年でしたが、その自問があってこそ、記者の仕事をする中で困難にぶつかり転んでも起き上がってこられました。人生に無駄なことは何もないと実感しています。

私は編集委員として、いまも日々現場で取材を続けています。取材の基本は、言うまでもなく、人に会い、話を聞くことです。この仕事には、驚きと気づき、そして感動があります。それを読者の方々に、社会に伝えたいと、愚直に取材を続けてきました。私が興味を抱いて取材する対象は、なぜか中国残留日本人孤児や売春宿に売られたアジアの子どもたち、虐待を受けた子どもたちなど社会的に弱い立場にいる方々が多いのですが、その背景にはICUでの学びや体験があることに改めて気づかされます。

ICUの卒業生には報道機関に進まれた方が数多くいます。著名な方々が多い中、私のような者を選んでいただき、本当に恐縮しています。DAY賞の名に恥じないよう、今後も精進して参りたいと思います。

国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」に「吃驚（びっくり）したいといふのが僕の願（ねがひ）なんです。不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です」という一文が出てきます。それは、まさしく私の願いでもあります。目の前で起きることを当然のものとは思わず、いつも驚く人であり続けたい。ICUで始まった驚きの旅を、今後も続けていきたいと思います。ありがとうございました。

"Excuse me, would you tell me what is so funny?" I remember clearly, plucking up my courage, to ask the student sitting next to me. In the biggest lecture theater in the then N-Hall (Natural Sciences), it was orientation time for the incoming freshmen at the beginning of the school year. On the podium, a non-Japanese teacher was saying something in English, which was mumbo jumbo to me. But on occasion, my classmates would laugh, so swallowing my pride, I questioned my neighbor.

I fretted furiously that I was out-of-place at this university. As a non-starter of a student, I wish to express my sincere gratitude for selecting me for the DAY award.

Up to high school, I threw myself into competitive swimming, shuttling between school and the pool and raced in the Inter-High School or the Japanese National Championships. Being utterly exhausted by the 7000 to 8000 meters training in the morning and evening, I had neither studied English nor read a book. For me, ICU was the place that taught me my ignorance. The joy of learning, the pleasure of meeting people, the satisfaction of jumping into the unknown, the delight of a challenge – in one stroke, ICU had expanded my universe.

At the matriculation ceremony, when the blooming cherry trees were beginning to sprinkle their petals, each new student's name was read out. The signing of the pledge based on the Universal Declaration of Human Rights is etched deeply in my heart. At that time, I had no idea what is contained in this document, but we felt that each one of us was treated as an individual. The Universal Declaration pledge in itself influenced my later career path.

I had a vague longing to be able to speak English and was attracted by the campus, which I had visited, and applied to enter ICU. On telling my classmates at an ordinary prefectural high school in the Kansai (Greater Osaka) area that I was going to ICU, one friend would ask, "Are you going overseas?" I would rebut, that ICU stands for International Christian University. Then another would query, "Are you becoming a nun?" I did not expect to be accepted, but the magnitude of the cultural shock on entering ICU was honestly bigger than at Tennessee State University, where I studied abroad on an exchange program in my junior year.

What stood out were: students crossing their legs in the classroom, asking the teacher questions while sipping coffee from paper cups, students evaluating the teachers, the eccentric character and behavior of my mates in the same section or older friends, the many non-Japanese on the campus, the students using the Library or the Diffendorfer Memorial Hall, Chapel hour… As a Japanese born and bred, who had only known swimming, everything I saw and experienced was an encounter with a new set of values, one surprise after another.

Thirty-four years have elapsed since I became a reporter for the Asahi Shimbun. Having decided to go into journalism and on my first try to get employment, all the newspaper companies, including Asahi, turned me down. So, I decided to repeat my final year, putting my dissertation on hold. Back then, it was difficult for women, once graduated from university, to find a job at Japanese companies. As my parents were opposed to this postponement, I had to work part-time at a brokerage firm to earn my school fees. "Let's give it an all out try. If I don't succeed, I'll do something completely different." On my second attempt, I was able to join the Asahi Shimbun. During the one-year standstill, the ICU career advisor continued to encourage me. "Do I really want to become a journalist?" was the question I asked myself again and again. This self-examination forged me so that I could make a comeback, even if a failed challenge had brought me down. Everything that happens in our lives has a meaning.

As a senior staff writer, I am even today reporting from the front lines. Needless to say, the work principle is to meet people and to hear their story. In journalism, there is surprise, new awareness and deep emotion, which I try to convey to the readers and society at large through the articles I write. The people that concern me and I write about are the vulnerable in society: Japanese war orphans left behind in China, children in Asia trafficked to brothels, abused youngsters. I recognize that in the backdrop is the education and experience I gained at ICU.

There are plenty of alumni working in the media, many of them renowned. I am extremely grateful for this DAY award and will diligently apply myself to my work to live up to this honor.

In Doppo Kunikida's short story "Beef and Potatoes," he writes, "it is my desire to be amazed. I want to awe at the magical cosmos." That is exactly my wish as well. One should not take for granted what is happening in front of us, but I want to be someone who is ceaselessly surprised. The journey of wonderment that began at ICU will continue. Thank you.

大塚桃奈氏

（64 ID20 アーツアンドサイエンス学科卒）
OTSUKA, Momona (CLA64, ID20, AS)

高校３年時のイギリス留学をきっかけに、服を取り巻く社会問題に課題意識を持ち、ICU在学中もコスタリカ、スウェーデンなどに自ら留学。卒業後、徳島県・上勝町へ移住、現在株式会社BIG EYE COMPANYのChief Environmental Officer（CEO）として、公共複合型施設「上勝町ゼロ・ウェイストセンター WHY」を運営し、併設するホテルにはコロナ禍の中で年間1,200人の宿泊客を集める。2003年に自治体で初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」をした人口約1,500人の上勝町で、日々のごみと向き合い、循環型社会の実現を目指す活動に伴走中。

Momona Otsuka is CEO (Chief Environmental Officer) of BIG EYE COMPANY, located in Kamikatsu-cho, a small town in Tokushima known for the Japan's first town which made "zero waste" declaration in 2003. She is currently managing the town's key facility for "zero waste" called Kamikatsu Zero Waste Center, consisting of recycling waste bins & stock yard, learning center, collaborative laboratory, and the accommodation facility, and has successfully gathered over 1,200 people from all over Japan in one year to the town with a population of 1,500.

この度は素晴らしい先輩方とともに名誉ある賞をお贈りいただきましたことに、こころより感謝申し上げると同時に、大変恐縮しています。このような形で母校より身に余る評価をいただき、光栄に存じます。

ICUでのキャンパスライフを通じて、多様なダイアローグを重ねるなかで触れた柔軟なまなざしや出逢ったひとびとの異なる価値観は、これからの暮らしの在り方にあたらしい可能性を与えてくれました。2020年の春にICUを卒業したわたしは、暮らしや仕事を新たに自らつくりだしていける環境を求めて、徳島県・上勝町へ希望を胸に移り住みました。上勝町は、四国一ちいさな町で「日本で最も美しい村連合」の一つでありますが、さらにこの町をユニークにする取り組みの一つに「ゼロ・ウェイスト」があります。上勝町は野焼き場や小型焼却炉の閉鎖がつづいたピンチを受け、2003年に日本の自治体としてはじめて「ゼロ・ウェイスト宣言」を発表し、ごみを出さない政策へ舵を切ったことを機に町一体となって活動を続けています。2020年５月30日には、公共複合施設である「上勝町ゼロ・ウェイストセンター“WHY”」が新たにオープンし、わたしの役割はここの施設運営を通じて循環型社会実現に貢献することです。

上勝へ移住をしてもうすぐ２年が経ちますが、DAY賞をいただくにはまだ道半ばで何も達成できていないというのが正直な気持ちです。これまでメディア、学校、国際女性ビジネス会議などと様々な場でまちの「ゼロ・ウェイスト」の取り組みを話す機会をいただくなかで、それぞれの質問とひたすらに向き合ってきました。わたしが発したことばによって、小さくも何かアクションが生じたり、あたらしい出会いが生まれている事実をわたしは素直によろこびたいと思います。いまわたしができることは伝えることだと考え、数々の対話やインタビューに応えてきました。しかし、ことばと現実の間には多くのギャップを感じており、こころのなかに迷いや戸惑いが生じることがあります。

ゼロ・ウェイストセンターの活動は、まちの住民が日々行ってきた小さな積み重ねの上にあるものです。毎日の暮らしは、地域のなかにある何気ない時間の積み重ねからなりたち、おなじまちにともに暮らすには「他者への理解」が欠かせません。上勝のひとびとがたどってきた道や、日々どんなことと向き合っているのかなど、暮らしの記憶をたどることからまちづくりははじまるのだと思います。まちづくりとは、暮らしづくりなのだと思います。

地域コミュニティに根ざした活動やゼロ・ウェイストの活動は、現代社会で見えづらくなったあらゆるものとの関係性を再び見つめ直すきっかけをもたらしてくれると感じます。わたしの人生はわたし自身がつくっていると勘違いしてしまいがちですが、過去からの知恵を受け継ぎ、多くの方の支えや周りを取り巻く自然環境によって生かされていることで、いまの活動がつづけられています。これまで、そとへそとへと、そのことばかりに気を取られてしまっていましたが、悠久的な流れの中でつづいてきたものやなくなったものを見つめ直し、まちのなかにあるひとの営みを掬いながらこれからのみらいのことを、わたし自身のことばでこれからも考えつづけていきたいです。

最後になりますが、今日に至るまで勉学を支えてくれた家族をはじめ、先生方や友人、上勝の仲間たち、そしてこれまでの探求のなかで出会ったすべての方に感謝申し上げます。

First, let me express my gratitude for the prestigious award, presented to outstanding senior alumni and myself this year. At the same time, I am overwhelmed and honored that my alma mater has evaluated me so highly.

Through the campus life, the repeated diverse dialogue, tolerance and flexibility shown to me and the different value standards of the people I met, new possibilities opened in my future path. On graduating from ICU, I relocated to Kamikatsu town, Tokushima prefecture, searching for an environment to create my own profession and lifestyle. Kamikatsu is a small pastoral community and designated as one of the Most Beautiful Villages in Japan. The "Zero Waste" project makes this town unique. With the ban on open-air waste burning and closure of small-scale incinerators, the town faced a challenge. In 2003, it became the first municipality in Japan to put forth a Zero Waste Declaration and a policy of not emitting any trash. The whole public organization and all its inhabitants are wholeheartedly behind this undertaking. On May 30, 2020, the Kamikatsu Zero Waste Center WHY was newly opened, where I am responsible for facility operation and for contributing to the creation of a circular society.

Nearly two years have passed since I moved to Kamikatsu. My honest feeling is that I am still halfway and have not yet achieved anything to deserve a DAY award. In the media, schools, International Conference for Women in Business and other opportunities, I have tried to explain about Kamikatsu's Zero Waste efforts and to respond to each and every question. I am overjoyed that the words I utter can trigger ripple effects and new encounters. What I can do now is to convey the message in the conversation and interviews I hold. However, the large gap between the rhetoric and reality on occasion foments doubt and indecision in me.

The Zero Waste Center rests on the small steps taken by townsfolk going about their daily lives. Village life is the accumulation of everyday moments, where understanding of and empathy for others are essential for people to coexist. Town building can only start after searching through the shared memory, reverting to the path followed by Kamikatsu forebears and tackling the everyday issues. Town building is lifestyle building.

The Zero Waste and local activities provide hints to clarify the interlink between things, that is practically invisible in this modern age. Life is whatever one makes is the wrong conclusion to reach. Our lives are made complete by inheriting the wisdom of the past, drawing on the cooperation of those around us and relying on the natural environment. Up till now, the externalities had fixated us. We must go back and search for what has disappeared and what has remained from time immemorial. I want to continue to think through about the future in my own words, gathering up the workings of people in this town.

Lastly, I would like thank my family, professors and friends, who have supported me in my studies, colleagues at Kamikatsu and everyone whom I have met on my quest.

同窓会年次総会 2022年は新D館からオンライン開催

文：新村敏雄（本誌）　写真：八藤まなみ（本誌）

2022年の同窓会桜祭り（同窓会総会、DAY賞表彰、卒業50周年記念式典などの総合イベント）は、改修が完了したばかりの新ディッフェンドルファー記念館で３月26日執り行われた。年明けからコロナ禍の第６波が広がったなか、３年連続のオンライン開催となった。当日は111名が出席した。

2021年度決算では、20年目記念会費で複数回納入いただいたことなどから収入が予算を上回った一方、コロナで活動が制約されたことや、オンライン活動による費用削減もあり、支出は前の年度より大幅に改善したことが報告された。

今年度から新同窓会長に就任した廣岡敏行さんは、同窓会長では初のセプテンバー。リビア、イラン、カンボジア、旧ソ連など世界各地での滞在経験から「ものごとを多面的にとらえることを身につけた」と自己紹介した。櫻井淳二前会長をはじめ、同窓会を支えてきたすべての関係者への感謝を述べるとともに、「ICUが『明日の大学』になるうえで、同窓会はどう貢献できるかを考えたい」と語った。

今年卒業50周年を迎えたのは、シーベリーチャペル改装で多額の寄付をいただいた16期の皆さんで、D館とオンラインで合計30人が参加した。代表として挨拶を述べた大西直樹さんは「1968年入学の我々の中では、大学紛争のため卒業を延ばした人も多く、今年が50周年とは思っていない人もいる」と困難な時期に学生だったことを振り返った。

入学して驚かされた多くのことの中でも、日本の大学では初のランゲージラボ、学生会館にあたるD館にステージがあったこと、戦後では初の、大学へのパイプオルガン導入などが印象深かったという。「自分たちが学生だった当時は１学期２万円、１年６万円の学費だった。そろそろお返しをしないといけない年齢」であると語った。

続くDAY賞表彰式は、2006年の創設から数えて今年で17回目となり、これまで102名が受賞された。今回の受賞者は「２期から64期まで、家族にたとえれば３世代にわたる」と木越純選考委員長から紹介があった。「例年にない数の推薦をいただき、絞り込むのは至難の業」だったという。

表彰式で受賞者それぞれから在学時の思い出、卒業後の足取りについて心に深く響くスピーチをいただいたあと、エスキルドセン学務副学長から大学の近況報告があった。コロナで海外からの留学生が長期間入国できなかった問題は春から解消に向かい、22年秋学期にはほぼ通常に戻ることが期待されるが、「この１年間、海外の学生たちは困難な状況に置かれてきました」と説明。例としてロシアからのOYRの学生が、コロナで足止めされている間にウクライナへの軍事侵攻が始まり、入国が半年遅れたことを紹介した。

第２部では、昨年に続きICU祭実行委員会が桜の開花状況を現場からリアルタイムで中継。続いて、D館リニューアルについて樺島榮一郎さん（青山学院大学教授、37 ID93）から見どころをご紹介いただいた。「スケルトン改修」という工法により、建物の基本構造は残しつつ、窓ガラスを強化ガラスに更新したり床や天井の張り替え、断熱工事などを施したという。建物外部の北側は噴水が見えるように樹木を整理し、噴水をライトアップしたほか、オーディトリアムは設備を一新した。館内の様子は有志の学生が制作したビデオで紹介された。

新D館のオーディトリアムは、2021年11月竣工後、同窓会総会が初の公式利用となったことから、大神楽師の鏡味味千代さん（44 ID00）が真新しいステージでお祝いの大神楽を披露された。顎に載せた台の上に茶碗や板、化粧房を次々と積み上げていく「五階茶碗」、傘のうえで金輪や桝をくるくる回す「傘の曲」などの見事な技に、温かな拍手が送られた。

あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

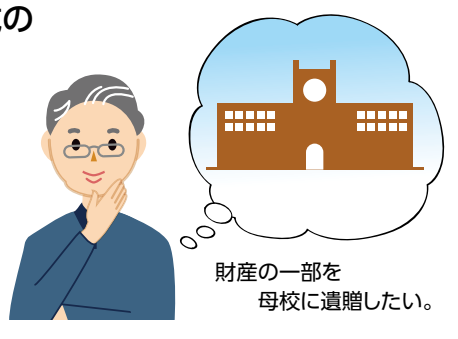
三井住友信託銀行の遺言信託では、皆さまの財産に関するご意思を正確に反映する遺言書作成のご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。
まずは財務コンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託（執行コース）手数料等について（消費税等込み）】（2022年7月1日現在）
〈お申込時〉基本手数料：330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本など取り寄せに関する費用等が必要になります。※契約締結後に、解約、遺言書正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。
〈遺言書保管中〉遺言書保管料：毎年6,600円　〈遺言執行時〉遺言執行報酬：当社所定の報酬を申し受けます。（最低報酬額：1,100,000円）
上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。
この制度により遺贈をされる場合は基本手数料が5万円割引となります。ご相談の際にお申し出ください。

お問い合わせは下記まで、最寄りの店舗にお取次いたします。
0120-977-641　受付時間　平日9:00～17:00（土・日・祝日および12/31～1/3はご利用いただけません）　三井住友信託　遺言信託　検索



その人を信じて、その人に託す。Meet The Trust Bank
三井住友信託銀行

New Alumni Association

スタートしました!　新しい同窓会体制

2022年4月、ICU同窓会は新体制となり、廣岡敏行会長が率いることとなった。
同窓会活動を盛り上げていく副会長7人を紹介するとともに、廣岡会長に今後の展望を寄せていただいた。

写真：廣岡・武藤・新村各氏は滝沢貴大（本誌）　それ以外は本人提供

ID87、31期の廣岡敏行です。本年４月よりICU同窓会の会長を務めさせて頂いております。よろしくお願いします。

ICU同窓会は、献学以来約70年を迎えようとしているICUとほぼ同い年です。この約70年の間、同窓会に関わってこられた先輩の皆様、歴代の同窓会会長、理事、評議員、また同窓生のみな様のご尽力により、ICU同窓会はここまで継続し、またその活動規模も大きくなってきたと思います。一方で、私たちを取り巻く環境や価値観もかわりました。このような様々の変化を鑑みると、ICU同窓会には同窓会の目的、果たすべき役割や提供すべき付加価値を再確認しつつ、「明日の同窓会」を目指して進む時がきていると考えられます。この考えのもとに、ICU同窓会がより同窓生、現役生及び大学にとってかけがえのない存在となるべく、まずはCritical Thinkingを自分自身（同窓会）に向け、４月より新たな理事会が始動したところです。同窓会が様々な課題に取り組むにあたり、同窓生みな様のご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

同窓会会長
廣岡敏行
（HIROOKA, Toshiyuki／31 ID87）

1987 年卒業（セプテンバーのため６月）。トヨタ自動車に入社し海外渉外業務に従事。複数の業界を経験後、1997 年より金融業界、2000 年より資産運用業界で働く。転職を重ねている為、新規ビジネスの立ち上げからマーケティングまで、様々な業種と職種の経験を持つ。

財務部担当副会長
滝本訓夫
（TAKIMOTO, Norio／32 ID88）

ICU 同窓会財務部は、基金および一般会計他の財源を適切に管理し、収入の充実を図るとともに支出の管理を行っております。この活動を通じて、会員同士の親睦、大学の発展、そして国際的な文化の交流を支えて参ります。また、湯浅・細木記念奨学金を通じて、在学生に対するサポートを行っております。

学生部担当副会長
松本典子
（MATSUMOTO, Noriko／45 ID01）

学生部は、現役生のニーズに応えるべく、現役生の「今」と「明日」を結ぶ役割を目指しています。コロナ禍の２年間も試行錯誤しつつ現役生の声に耳を傾け、オンラインイベント「ゆる～いキャリア相談会」通称「ゆるキャリ」を実施してきました。今後は、リアル版「ゆるキャリ」の実施など、現役生と卒業生を結ぶ場の提供を検討していきます。

総務部担当副会長
吉澤洋
（YOSHIZAWA, Hiroshi／33 ID89, G1991）

総務部は、事務局メンバーとともに同窓会の円滑な組織運営を目指して参ります。総会、DAY 表彰式、卒業 50 周年記念式典、懇親会など、バーチャルは残しつつ、よりリアルの色彩を強くし開催します。同窓会の主役は同窓生の皆様です。皆様が集まっていただいて初めて同窓会の存在意義があります。仲間との出会い、再会の場としてぜひご活用ください。

組織部担当副会長
武藤小枝里
（MUTO, Saeri ／35 ID91, G1993）

組織部は、同窓生のコミュニティープラットフォームとして、世界中に広がる同窓生との「繋がりと絆づくり」のお手伝いをしています。ICU 卒業後も、国内外及び部・サークル・寮、趣味・関心により構成される同窓会支部の皆様とともに、同窓会の活動拡大に向け、より多くの卒業生に同窓会活動に参加いただける仕組みや活動を目指します。

大学･募金部担当副会長
藤田直志
（FUJITA, Tadashi／25 ID81）

大学・募金部の目的は大学、そして同窓会の様々な活動と連携を図り卒業生の一人ひとりとの絆づくりを大切にすることで、① Peace Bell 奨学金、②キャンパスの自然環境保全、③ D 館東棟修繕募金の活動を実施して参ります。さらに、従来の事業部の活動については、卒業生との絆づくりを目指して今後の体制と活動を検討して参ります。

DC部担当副会長
鳥居幹太
（TORII, Kanta／31 ID87）

DC 部は、デジタル技術を利用して同窓会に関わるすべてのコミュニケーションがスムーズでタイムリーにできることを目指して活動しています。同窓生同士が活発にコミュニケーションをとれるよう、他部署と連携・協業しながら公式 Web サイト・メール・SNS など活用したさまざまな活動の企画・運営を進めていきます。

広報部担当副会長
新村敏雄
（SHINMURA, Toshio／27 ID83）

広報部のミッションは「同窓生、大学、在学生間のコミュニケーション基盤の構築と、同窓会活動のプロモーション」です。主な活動は①年２回の同窓会報「Alumni News」の発行。本年３月よりネットでの配信も始めました。②同窓会 Web サイトや Facebook、Twitter での情報発信。③多分野で活躍する同窓生、同窓会主催のイベント、最新の大学や在学生の様子の取材・紹介。

7A_People 牧島かれん (44 ID00/G2007)

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

MAKISHIMA, Karen

2000年、社会科学科卒。01年、米George Washington University、Graduate School of Political Management修士課程修了。08年、大学院行政学研究科博士後期課程修了（Ph.D）。12年、第46回衆議院選挙に初当選。15年、第３次安倍改造内閣で、内閣府大臣政務官（地方創生・金融・防災担当）。21年10月から22年８月、デジタル大臣、行政改革担当大臣、内閣府特命担当大臣（規制改革）を務める。

牧島かれんさんは、第1次岸田文雄内閣でデジタル大臣、行政改革担当大臣、内閣府特命担当大臣（規制改革）を務めた。2014年、初代女性活躍担当大臣となった有村治子さん（37 ID93）に次いで、ICU生2人目の大臣だ。牧島さんは実は同窓会でも活躍していて、2004年～05年には学生部担当副会長として現役学生と同窓会の橋渡し役として実績を残している。DX（デジタルトランスフォーメーション）など日本の社会変革を担うことになった牧島さんに、政治への思い、社会変革を目指すICU生へのメッセージなどを聞いた。

文：望月厚志（本紙）　写真：牧島かれん事務所提供

ウズベキスタンで セクメにばったり

―― 在学中はどのような学生生活を送っていらっしゃいましたか。

牧島：セクションメイト（セクメ）と過ごす時間が長く、その時間をとても大事にしていました。さまざまなバックグラウンドをもった人たちがいたので、すごく刺激を受けたと思います。セクメとは今でも、メーリングリストを使って連絡を取り合っています。

2019年のことですが、国会議員外交の一環でウズベキスタンを訪問したことがあります。ホテルで朝食ブッフェに行ったら、さまざまなローカルフードが並んでいて、それを写真に撮ってSNSに投稿したんです。そうしたら、あるセクメがそれを見て「自分も同じホテルに泊まっています！」と連絡が来て、翌日、その朝食ブッフェ会場で再会を果たしました。その友人はたまたま国際金融の会議があって訪問していたのですが、「本当に世界中いろいろなところにICU生はいるものだ」と感心しました。

―― 同窓会学生部担当副会長としてご尽力なさっていた時は、確か他大学で講師や研究員をなさっていたと思います。その後、どのような経緯で政治家になることになったのでしょうか。

牧島：私は、長らく米国の政治を研究してきましたが、修士は米国ワシントンD.C.の大学で取ったのです。そこで、2000年の大統領選挙（G.W.ブッシュが当選）と01年の同時多発テロ（9.11）を経験しました。9.11を目撃してしまった日本人として、国のあり方とか、有事への備えに対しての強い思いを持つようになりました。アカデミアで研究してきたことを実践しなければならない場面があるかもしれない。そのときにはヘジテイトしないで行動しよう――ということも考えていました。

私の父が神奈川県議会議員をしていて、社会のさまざまな課題を政治が解決するプロセスを身近に見ていたということもあります。それと、私を後継者に指名してくださった河野洋平先生には、実は学部の学生時代からいろいろとアドバイスをいただいたり、お付き合いがあったのです。政治を研究するならと、米国の留学先としてワシントンD.C.を勧めてくださったのも河野先生でした。

長年衆議院議長を務められた、その河野先生が国会議員を引退なさる、私が西尾隆先生（22 ID78/G1980/G1983）の下で博士論文を書き終えることができたなど、いろいろなことが重なって、自民党公認候補として衆議院議員選挙に出馬することになったのです。

―― 自民党のIT戦略特別委員会、そしてデジタル大臣と、国のDXという大きな変革に長く取り組まれているわけですが、一番の課題はなんだとお考えですか。

牧島：企業や産業という面で言えば、日本の経済活動の大きな部分を中小企業の皆さんが支えてくださっています。その中小企業の皆さんが、DXに一緒に取り組んでいただくと、大きく変わると期待しています。

私は実は、デジタル/行革/規制改革だけではなくて、サイバーセキュリティも担当していました。今年は国際情勢が激変していることもあり、サイバーセキュリティの事案が目に見えて増えているのです。

大企業や行政組織に限らず、中小企業や地方の病院といったところまで、攻撃の対象になってしまいました。ですから、国じゅうのIT担当者や経営者に、サプライチェーン全体でセキュリティを考えてくださいとお願いしています。大都会とか、大企業とかの話ではなくなってきているサイバー空間というものを、さまざまな産業に関わる皆さんに、当事者意識を持って関わっていただきたい。それに加えて、DXを一緒に進めるというところが課題かなと思います。

グローバルな視点で 地球課題の解決を

―― ICU卒業生には、政治家に限らず企業やNGO/NPOなど、さまざまな立場で社会変革を起こそうしている人たちが多くいます。

牧島：私はICUにいた時間が、学部、PhD（博士課程）、同窓会と大変長く、私のコアを作り上げてくれていたものだと思っています。

不透明な時代とか、将来予測が見えづらいときに、悲観するのではなく、自分が何をすることで社会により良い明日をもたらすことができるかを考え、自分の何かが他の人の何かに繋がるように行動をしていこうという心は、ICU生の皆さんの中にはきっとあると思う。

特にグローバルに目を向けると、手当をしなければならない国際的な事案というものはたくさん起きていて、それが遠くの出来事ではなく地球課題なんだというふうにとらえることができるのが、これまたICU生だと私は信じています。

グローバルに飛び回っているICUの皆さんと、さまざまな課題に対し、国内に限らずに世界全体で見ていけるような運動を一緒に展開していただけるとありがたいと思います。

―― ３つの大臣職を経験なさって、政治家として牧島さんが描く未来の日本のイメージはどのようなものですか。

牧島：日本は、人口減少社会であり、高齢化社会で、少子化がますます進行している状況です。その日本に住まう人々が幸せを感じることができる日々をいかに実現するのか。そこに必要なのはイノベーションです。言い換えると、課題解決に関わる人を増やすことだと思っていて、その点について私は割と楽観的に見ています。

民主主義のプロセスをどうやって守っていけばいいのか、というような大きな問いに向き合ったり、自分が社会のために何ができるのかということに関心を持ってくれる若い世代もたくさん育ってきたと思います。

“失われた何十年”という表現がありますが、一方で地方創生/デジタル田園都市などに対して、多くの民間のプレーヤーが、行政課題に関わってくださるようになった――というこの流れは、私は明るい未来の兆しだと感じています。社会課題を、いろいろな世代の方、いろいろな場所に住んでいる、いろいろなバックグラウンドをもっている人が関わって解決に導く日本になる。それが日本ならできるというのが、私が描く未来像です。

Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、
その地で活動を始めた経緯やその地の魅力について話を聞く本シリーズ。
今回は、兵庫県豊岡市に拠点を移した劇団・青年団の一員である
俳優の山内健司氏に、ものづくりと土地の関係について聞いた。

困難な時代だからこそ ―― 諦めずにこの地で舞台を創る

兵庫県 俳優　山内健司氏（31 ID87）

文：安楽由紀子（本誌）　写真：本人提供

玄関から30m先に山がある。俳優・山内健司氏はその山を駆けることを習慣にしている。

京都から車で２時間半、兵庫県豊岡市は市域の約８割を森林が占め、北は日本海に接している。東京23区よりも少しだけ大きい約698平方キロメートルの地に、人口はたったの約８万人（23区の面積は約628平方キロメートル、人口約965万人）。

「余白が多く、一人ひとりのパーソナルスペースが大きい。そして、いろんなものへのアクセスが非常に近いんですよ。山に行けば多種多様な鳥がすぐ近くで見られる。約160万年前の噴火によって形成された玄武岩に直接触れられる。古墳群もありますし、奈良時代にできた但馬国分寺や戦前の復興建築群もある。大きな図書館に放り込まれたような感覚があります」

2020年、劇作家・演出家の平田オリザ氏（30 ID86）が主宰する劇団・青年団は、豊岡市に拠点を移した。21年春には、同市に兵庫県立芸術文化観光専門職大学が新設され、学長に平田氏が就任。それを機に青年団の一員である山内氏も移住し、同大学で講師を務めている。

「豊岡市は、2014年に舞台芸術に特化した施設・城崎国際アートセンターを開設し、世界中からパフォーマーたちが集まってきていて、その頃からこの地に“世界と繋がる窓”のようなものを感じていました。東京は地価が高いし、みんな忙しい。ものを作るには圧倒的に東京よりもここの方がいいと思っています」

年間60日以上、山にいた

1983年にICUに入学。きっかけは友人が志望していたから。緑が多いキャンパスを見て「こういう人生もある

PEACEMIND

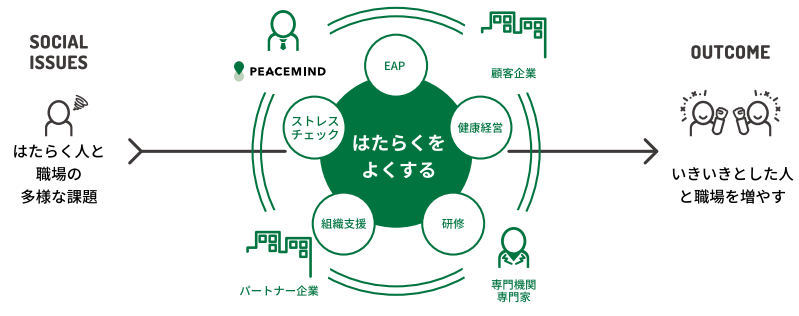
私たちは、「はたらくをよくする®」会社です。

ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、
心豊かな未来を創る」をミッションに「はたらくをよくする」
ソリューションを提供している企業です。
職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の
人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の方からのご相談
をお受けしています
国内・グローバル企業の成長支援を一緒にチャレンジしてくれる
仲間も募集しています。

ピースマインド株式会社
代表取締役社長・共同創業者
荻原 英人（ID00）

Working Better Together®

「はたらくをよくする」ために、はたらく人と職場を支援する様々な専門サービスをご提供しています。



EAP従業員支援プログラム	研修	ハラスメント対策支援	ウェルネスプログラム
ストレスチェック	クライシス支援	休職・復職者支援	健康経営支援

サービス開始から 23年
お取引企業 1,000社/年
外資系顧客構成比 35%

03-3541-8660
https://www.peacemind.co.jp/

https://note.com/peacemind

ピースマインド社内の「はたらくをよくする」取り組みをご紹介！！ぜひご覧ください。

管理部 人事総務グループ長
小島 真理（ID87）

青年団「暗愚小傳」（2015 年、© 青木司） ／ フランス・リールにて「舌切り雀」公演（2011 年） ／ ワンダーフォーゲル部 30 周年登山でネパールのアイランドピークへ登頂（1993 年）

のかな」と軽い気持ちで受験した。プロフィールには「在学中に青年団に参加」と書かれているが、当時から演劇にどっぷり浸かっていたのか問うと、「いや、山でしたね」と即答した。

「中学校からずっと山登りをしていまして、大学に入ったら本格的に登ろうと楽しみに入学したんです。ところが、僕が入学したときには山岳部はもう潰れていて、緩やかなワンダーフォーゲル部しかなかった。入部しようと部室の扉を開けたら、そこにいたのが１年先輩の平田。彼はワンゲル部員だったんです。ほどなく平田が初めて脚本を書いて青年団の旗揚げ公演を行ったんですが、出演者たちにもワンゲルの人が何人かいて。僕も劇団を手伝うようになり、２年生の６月には出演していました」

入団したとはいえ、在学中は劇団よりもとにかく山だった。

「ワンゲルの活動以外でも個人的に登っていたので、年間で60日以上は山に行っていたんじゃないかな。よくそれで４年で卒業できたと思いますよ（笑）。ICU って女性が多いじゃないですか。ワンゲルも女性が多い。身体能力の高い人たちだけでアスリート的に山に挑むのではなく、いろんな能力や体格、性格の人たちとみんなで一緒に登る楽しさをICUのワンゲルで教わったように思いますね」

３年生の夏でワンゲルを引退して以降は、青年団の活動の比重が増す。時代はバブル景気真っ盛り。手を挙げれば名だたる企業に就職できる状況だったが、就活はしなかった。

「才能がある人が集っていた。それを“学生時代の思い出”としてとどめるのは何か違うように思ったんです。今、価値を感じていることを人生の真ん中に置けないだろうかと考えました」

俳優は他者の言葉を話す仕事

だが、俳優という仕事に対して心から「面白い」と思えるようになったのは、もっと後、30歳手前のことだった。89年に初演した「ソウル市民」で韓国に行き、セリフをすべて韓国語で覚え直して上演した。

「その時、『俳優は他者の言葉を話す仕事だ』ということがはっきりとわかったんです。それまでは自分の経験に当てはめて言葉にするとか、その役の気持ちになりきって演じるとか、どこかそういうぬるさがあった。それがこの韓国公演で吹っ切れた。わかりにくい話かもしれませんけども、『俳優は他者の言葉を発する仕事だ』と覚悟が決まって、『これは面白い、どんな言葉でもしゃべってやる』とモチベーションがガツンと上がったんです」

ICU卒業以降、10人足らずで細々とやってきた劇団は、この公演のあと団員が爆発的に増え、今では約200人が在籍する劇団に成長した。

それから時は流れ、小学３年生から暮らしてきた東京を離れることになった。

「ICUは入学すると最初に世界人権宣言にサインしますよね。最初に我々は何を最も大切にすべきかを考え、大きな約束をする。そのことがものづくりやさまざまな人と触れ合う中ですごく効いてきたし、そうした大学のすごさが身を持ってわかってきました。豊岡市は自然が多く人口密度が低い土地ですが、だからといって何も管理されていないわけじゃない。やっぱり人間の社会です。雑多な情報がなく余白が多いからこそ、違う立場の人の意見がダイレクトに響いてくるように感じます。戦争が起き、感染症がまん延し、経済が沈み、不安定な時代の中で、僕たちは何を最も重んじるべきか。状況は困難かもしれないけども、東京ほど諦めきってる感じはしません。……もういいおっさんが青臭いこと言ってますけど」

山と演劇と人間と。今、原点に思いを馳せる。

ICU03 卒業生２名が経営している株式会社ギガデイン。油そば屋だったり、本格四川担々麺だったり、はたまた印度カリー店だったりを運営しています。この３，４年本当に大変でした。明大前駅に新店舗出店と同時にコロナ発生。キャンパスは目の前だというのに、生きたリアル明大生を見るまで１年以上の時間を費やしました。悪いことは続くもので、好調に運営していたダルシムカリーで匂いの問題が発生。新宿区環境対策課の厳正な検査により、公害の認定を受け閉店。その半年後、吉祥寺店がパートナー企業のコロナ禍における経営方針の転換により移転。何とか生き延びて迎えた２０２２年５月。一蓮托生で１０年間やってきた、のれん分けの池袋店オーナーご乱心、無断で違う油そば店に。たった一日で看板まで付け替える、秀吉も驚く一夜城の如き築店。そんな目まぐるしいコロナ禍に於けるわが社をプロフェッショナルな立場から助けてくれたり、気兼ねなく遊びに行けるのは同窓の友人たちでした。そして、多くのＩＣＵ関係者が各店舗に来店してくれたこと、本当に感謝しかございません。THANK YOU!!

年会費割引がずっと続く！今なら ご入会＆最ご利用で大 23,000円相当* キャッシュバック＆ポイントプレゼント
海外＆国内旅行傷害保険は最高 5,000万円※補償！国内主要空港のラウンジは何度でも使える！
さらに同窓会にカード年会費とご利用代金の一部が還元されます！
※ 一部カード利用条件あり
キャンペーンは 2022.12.31 まで！

三井住友トラスト VISA ゴールドカード

年会費 ~~11,000 円（税込）~~ 2,750円（税込）

ロードサービス VISA ゴールドカード

年会費 ~~12,100 円（税込）~~ 3,300円（税込）

家族カードはどちらも 1,100 円（税込）！
WEB でのお申し込みは https://www.smtcard.jp/lp/goldcard.html
お申し込みの際は団体コード入力欄に 50140 をご入力ください。
くわしくは同封のチラシをご覧ください！
＊記載のポイント換算は1ポイント1円相当でポイント交換した場合です。（交換内容によっては1ポイント1円相当にならない場合もございます）
お問い合わせ・申込書ご請求 お問い合わせの際は ①郵便番号 ②ご住所 ③お名前（メールの場合はフリガナも）④お電話番号 ⑤所属団体名：ICU 同窓会（団体コード：A50140） をお知らせください。
☎0120-370-070 受付時間：9～17時（土・日・祝日・12/30～1/3を除く） ✉ Moushikomi@smtcard.jp
弊社は「個人情報の保護に関する法律」に基づき適正な保護を講じたうえで、管理・利用させていただきます。なお、個人情報の利用目的およびその範囲については、入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。
三井住友トラスト・カード SUMITOMO MITSUI TRUST CARD

ICU の PE に貢献した三隅達郎元教授　／　1972 年に建てられた体育館　／　体育館の内部（剣道部）
Prof. Tatsuo Misumi, the founder of ICU PE program / Gym built in 1972 / Snapshot at Kendo class

大学のページ

From the University

当ページは、ICUアーカイブスが連載を担当しています。
皆さまが在学されていた当時の歴史やこれまで知らなかったICUについて知る機会にもなるかと存じますので、ぜひご一読ください。

文：松山龍彦（ICUアーカイブス）

PEに「レクリエーション」なぜ?

ICUを卒業した皆さんは必修科目としてPEを取りましたね。キャンパス内を走ったり、プールで泳いだり、バスケット、サッカー、変わったところではゴルフ、アーチェリー、和太鼓、ソーシャルダンス、太極拳、トランポリン、民俗舞踊などなど。「なぜ大学まで来て体育なの？」と最初は思った人も、終わってみれば身につけたものの大切さを理解できたのではないでしょうか。2016年の調査によれば、体育実技が全学必修となっているのは国公私立短大全体の約28%、私立大学だけだと20%未満です。ICUPEの充実したカリキュラムは決して普通ではないのです。1953年の開学当時から卒業要件140単位のうち４単位は保健体育（実技・講義ともに多くの選択科目があり、それぞれ２単位の４単位。現在は実技・講義それぞれ１単位の計２単位）、講義の内容は保健・栄養・個人と公衆衛生・個人と集団レクリエーション…レクリエーション？　それって修学旅行やキャンプで参加者の親睦を深めるためのミニゲームやクイズ大会などのお楽しみ企画なんじゃないか。それって体育なの？　実はそこにICU保健体育科目のオリジナリティーの源泉がありました。

レクリエーションの歴史

レクリエーションの歴史をたどると、第一次世界大戦後のドイツ・イタリアや大恐慌後のアメリカでの政策・市民運動に行きつきます。不況で失業者が増加する中、人間らしさの回復のために展開された文化活動をも含む広い概念をもった運動だったのです。ドイツではナチスが創出したKraft durch Freude（「歓喜力行団」喜びを通じた強壮）、イタリアではムッソリーニ政権の政策Dopolavoro（労働の後）があります。これらは理想社会確立のための全体主義的国策でした。アメリカでは青少年の健全育成や大恐慌後の失業者の不安感を和らげ自分を取り戻す運動として発展しました。全米レクリエーション協会が設立された２年後の1932（昭和７）年に開催された第１回世界レクリエーション会議には日本からの代表も参加しています。この派遣を後押ししたのが当時日本YMCAの主事でありICU創立の中心人物である斎藤惣一とラッセル・ダーギンだったのです。斎藤惣一は1886（明治19）年福岡県生まれのクリスチャン。東京帝国大学卒業後、第五高等学校（のちの熊本大学）で英文学教授。1917（大正６）年に日本YMCA同盟主事に就任し1921（大正10）年に総主事になっています。戦後は引揚援護院初代長官に就き、1948（昭和23）年の日本レクリエーション協会発足とともにその初代会長に就任しました。彼の幅広い交流は皇室にもおよび、三笠宮、秩父宮らのスポーツや教育ほか社会事業への関わりに貢献したといわれています。

1920年代に世界に広がったレクリエーション運動は競技スポーツだけではなく、ゲームや種々の文化活動にまで及ぶものでした。日本では1938（昭和13）年に「厚生省」が発足しました。「厚生」という言葉は中国古代の歴史を記した『書経』の中の言葉、「厚生惟和」（生を厚くしてこれ和す＝国民の生活を豊かにする）からつけられたものです。レクリエーションは「厚生運動」と訳され、その外郭団体として日本厚生協会が設立されました。そこにはダーギンほかのメンバーが集まっていました。終戦までは国策としての国民の体位と士気向上、鍛錬、奉公に利用された感のあった厚生運動ですが、白山源三郎をはじめ戦前からの提唱者の中には市民福祉運動としての本質を伝え続けた者もいました。白山いわく「厚生は鍛錬ではなくあくまで遊び」「鍛錬としての効用もあるが遊びとしての原点を否定してはならない」「生活において勤労と厚生は車の両輪のごときものである」「（理想的には）厚生が主で勤労が従であるようにならねばならない」（筆者意訳）。どうでしょうか、いま我々が話題にしているワーク・ライフ・バランス、FIRE（経済的自立による早期退職）にも通じる思想を、すでに1941（昭和16）年に語っています。戦後GHQの政策もあり積極的に展開されたレクリエーション運動によって、日本でもフォークダンスをはじめキャンプ・ハイキング・旅行・サイクリング・ゲーム・コーラス・演劇・音楽などの活動が一般市民に普及しました。今日われわれがレジャーと呼んでいる余暇活動はこの広がりの延長といっても過言ではありません。

ICUとレクリエーション思想

ICUのPEにレクリエーションの思想を注入したのは開学からの功労者である三隅達郎（みすみたつお）元教授です。1940年代から白山氏らとともにレクリエーション運動の中心にいた理論派の三隅氏はレクリエーション界のいわばご意見番で、その本質を著作ほかで発信するとともに、ICUにおいては学生野尻キャンプを定例化し、また全国の指導者育成のためのレクリエーション・ワークショップを12年にわたって開催するなど、実践の場においても大きな影響力を持った人物でした。三隅氏は、開学前年の1952（昭和27）年以来30年に亘ってICUに奉職した保健体育課程の生みの親であり育ての親です。早稲田大学政治経済学部の出身で社会福祉事業を専門としながら体育課程の主任になった事がICUのPEを象徴しているのではないでしょうか。レクリエーションの本質について彼は以下のように語っています。「楽しい感情を伴う経験であって、各自の自由意志により個人または集団でなされるあらゆる行為である。余暇になされる活動であって、人間教育の一端を担っている。ある結果のために行われるものであってはならないし、客観的・社会的な評価に耐えうるものでなくてはならない」（筆者抜粋）。こうやって見ていくと、ICUの体育やスポーツ活動が、他大学においていわゆる体育会系と呼ばれるものとは、そのありかたにおいて一線を画しているのも納得がいきますね。

レクリエーションは、ICUの掲げるリベラル・アーツによく調和する概念でした。そのため、三隅氏が去った後も人間教育としてのPEの伝統は脈々と受け継がれました。保健体育科の残した文書からは、体育とは何か、大学教育とは何か、教育とは、人間とは何かを問う姿勢から体とその動きから心の成長までの問題を考え続けていることが分かります。1983（昭和58）年から導入された講義課目「からだの科学」（現在は「からだ再考」）は保健体育科目ではなく一般教育科目としてオファーされています。その内容は「からだ」というものを文化・歴史・社会・科学・思想ほかあらゆる面から考察して、人間が体を動かすことの意味を問い自分の体を育てる（体育）こと、テクニックだけではない智慧を伴った身体技能の修得の重要性を認識すること、こころとからだの相互関係を知ること、ヘルスプロモーションの実践など、まさにICUリベラル・アーツの面目躍如と言えるものです。1987（昭和62）年に保健体育科が作成した文書からの抜粋で締めくくりたいと思います。

〈ICUにおける正課体育の目的〉

健康で豊かな生活を目指すことは、人間生活において不可欠の要素である。将来よき市民たるべきICU学生は、この価値を体得するために体育活動の実践をとおしてその原理と、具体的方法を身につける必要がある。正課体育では、人間の身体の構造を学び、更に体育、スポーツ、レクリエーション活動についての基本原理と技術の理解、社会生活において必要な生活技術、態度の修得、および自己の健康維持向上、更に他人の健康生活への責任と関心を追求する。

参考資料
・『国際基督教大学要覧1953-1955』（国際基督教大学）
・『履修の手引き1967-71, 1985-86』（国際基督教大学）
・白山源三郎「厚生夜話」『厚生の日本』昭和16年第５号（日本厚生協会、1941.5）
・三隅達郎『レクリエーション』IDE教育選書125（民主教育協会、1968.6）
・谷戸一雅「三隅達郎のレクリエーション観に関する研究」『レクリエーション研究』第14号（日本レジャー・レクリエーション学会、1985.10）
・高橋伸ほか「レクリエーション・ワークショップが指導者養成に果たした役割について」『レクリエーション研究』第28号（日本レジャー・レクリエーション学会、1993.10）
・『レクリエーション運動の五十年』（日本レクリエーション協会、1998.3）
・松岡信之『「からだ」再考』ICU一般教育シリーズ36（国際基督教大学教養学部、2003.5）
・都筑真ほか「戦時下における日本の厚生運動　厚生大会（1938-1940）を中心として」『筑波大学体育科学系紀要』34、p.27-43（筑波大学体育系, 2011.3）
・加藤幸真ほか「占領下における教育改革とレクリエーションの関係」『レジャー・レクリエーション研究』第69号、p.45-55（日本レジャー・レクリエーション学会、2012.3）
・『ICUのPE』ICUアーカイブズオーラルヒストリー第14回DVD（2022.4）
・『2016年度 大学・短期大学の保健体育教育実態調査報告書』（全国大学体育連合、2018.5）

アーチェリーの指導をする高橋伸教授 ／ 民俗舞踊を指導する近藤洋子教授 ／ Sense up exercise を指導する松岡信之教授
Prof. Takahashi in Archery class / Prof Kondo in Japanese folkdance / Prof. Matsuoka in Sense up exercise class

Why Recreation in PE?

ICU Archives provides a series of articles for this section from the last issue. We hope these stories will give you an opportunity to learn about the history of ICU, looking back on those times when you studied here and discovering facts which you were not aware of till now.

Text by Tatsuhiko Matsuyama (ICU Archives)

Physical education courses are set in the graduation requirements of ICU from its start. So we ran around the campus, swam in the pool, and played basketball, soccer etc. Some of us chose off-the-beaten-path activities, such as traditional Japanese drum, traditional Japanese folk dance or social dance, “Tai Chi,” trampoline. First, we wondered: “Why do we have to take PE at university?” Then, after it is all over, we understood the importance of what we have learned from it. According to a 2016 survey, only 28 percent of Japanese universities and colleges set PE as a course requirement; less than 20 percent of private universities. It is exceptional to see the broad and rich PE curriculum as we do. Since its foundation in 1953, the ICU regulations required students to earn a total of 140 credits to graduate, of which four credits must be from Health and Physical Education (HPE), specifically two credits from practical exercises and two credits from lectures (currently, one credit from practical exercises and one credit from lectures totaling two credits for the HPE curriculum) to be chosen from a wide range of selective courses for both practical exercises and lectures. These courses include health, nutrition, personal and public health, and individual/group recreation. “Recreation? Isn’t it a kind of the entertainment games or quiz competitions in a school trip or camp, as a get-to-know-each other event? How can it be PE?” Actually, our HPE started in close relationship with recreation.

The history of recreation（仮）

The history of recreation dates back to political and civil movements in the post-WWI Germany and Italy and depression-ridden America. Back then, recreation used to describe a broader range of activities, including cultural activities that were developed to resume touches of humanity as unemployment increased due to economic recession. Such examples include the Kraft durch Freude (KdF; German for “Strength through Joy”) movement in Nazi Germany and Dopolavoro (from dopo lavoro; Italian for “after work”) by the Mussolini regime in Italy. These national policies were built on totalitarianism to establish an ideal society. In the United States, recreational activities developed as a movement to help sustain the healthy growth of youth as well as to alleviate the uneasiness of the unemployed and regain their self-esteem after the Great Depression. The National Recreation Association (NRA) was established in 1930 and the first NRA meeting was held two years later, which was attended by a Japanese delegation. The delegation was formed under the support of YMCA associates—Soichi Saito and Russel L. Durgin—who also played a central role in founding ICU. Soichi Saito was a Christian born in Fukuoka Prefecture in 1886. After graduating from the Tokyo Imperial University (now the University of Tokyo), he taught English Literature at the National Fifth High School (now Kumamoto University). He was appointed Director of the League of the YMCA of Japan in 1917 and then promoted to Chairperson in 1921. After World War II, he took the position of Director of the Repatriation Relief Agency, and in 1948, he was appointed the first president of the National Recreation Association of Japan. His social network was so broad to include the Imperial Family, allegedly contributing to the engagement of His Imperial Highness Prince Mikasa, His Imperial Highness Prince Chichibu, and other members of the Imperial Family in sports, educational, and other social activities.

The recreation movement swept across the world in the 1920s, expanding beyond sports competitions to include mass games and cultural activities. In Japan, the “Kosei-sho,” Ministry of Health and Welfare was inaugurated in 1938. The term “Kosei” taken from “enriching the health of people to increase their welfare,” described in “Shujing,” a compilation of historical materials in ancient China. The word “recreation” was then translated to “Kosei” and the “Nippon Kosei Kyokai,” Japan Welfare Association was established by members including Russel L. Durgin as an extra-governmental body to support the movement. Though, up until the World War II was over, the Kosei movement had rather been utilized for the national policy to improve the people’s physique and morale as well as to enhance their discipline and service for Japan, there were yet some promotors of recreation, such as Genzaburo Shirayama, who had been active in advocating its essence as a civic welfare movement since before the war. Let me summarize some of his remarks on health and welfare: “Recreation should be pursued as fun, not discipline.; “Recreation may be effective in developing discipline, but we must not deny that recreation is basically rooted in fun.”; “Labor and welfare must work in tandem in life.”; and “(Ideally,) welfare should be a load and labor a servant” These words could be extremely radical in 1941, in militarism Japan that went into the Pacific War in the same year. His words came far ahead of the time. It has been 80 years since then, that we discuss about the common issues such as the work-life balance and FIRE (financial independence, retire early.) As a result of active promotion of the recreation movement, also supported under the GHQ's occupation policy, a variety of recreational activities gained popularity in Japan, including folk dance, camping, hiking, traveling, cycling, games, choruses, theatrical performances, and music. It is no exaggeration to say that spare-time activities that we call “leisure” today are the descendants of this movement.

The concept of recreation（仮）

It was Tatsuo Misumi, an ICU professor, who brought the concept of recreation to our PE, greatly contributing to the university since its inception. He was known as a theorist who led the recreation movement with Mr. Shirayama and other followers since the 1940s, and played a role as an advisor for the recreation promoters. He advocated the importance of recreation through his writings, launched the ICU students camp program at Lake Nojiri in the north of Nagano Prefecture, held the recreation workshops for recreation leaders for twelve years. Dr. Misumi was a great creator and developer of our health and physical education programs through 30 years of tenure since 1952, before ICU officially started. The fact that he was appointed to the head of the ICU PE courses as a graduate of the Waseda University, majoring social welfare service, represents the special characteristic of the ICU PE programs. He explains the essence of recreation as follows: “It is an experience accompanied by fun and an individual or group activity of any kind to be carried out at their own will. It is an activity to be done in spare time, meanwhile contributing to human education. It must not be intended to achieve a given performance; it must weather objective and social criticism.” Now, you will see a clear distinction between the sport and physical activities at ICU and those at other universities.

Recreation was a notion that well matched the liberal arts education upheld by ICU. As such, our PE tradition has been faithfully handed over even after Mr. Misumi retired. From the documents in the ICU Archives, we can see the unchanging attitude to ask itself -what physical education is, what university education is, what education is, and what human beings are -an effort to find answers to a whole range of issues provoked from the human body and its function, relation to the growth of the mind. The lecture class titled “Science of Karada,” later named to “The Holistic Approach to Karada,” has been offered as a general education course, not as a physical education class. This course is an embodiment of the core value of ICU’s liberal arts, as it provides insight into the human body from all aspects, including culture, history, science, and ideology, demonstrating the importance of training one’s own body (namely, physical training or education) in pursuit of the meaning of physical movements, of recognizing the significance of acquiring physical skills using knowledge and wisdom as well as techniques, of understanding the mutual relationship between the mind and the body, and of implementing health promotion. I would like to put my pen down by quoting some sentences from the documents prepared for the Health and Physical Education course in 1987.

〈Aim of Regular PE Courses at ICU〉

Leading a healthy and active life is an essential part of human life. To experience the value, ICU students—our future good citizens—must learn the principles through PE activities and master specific ways to enable such life. Through regular PE courses, you will learn the structure of the human body, deepen your understanding of the basic principles and techniques of physical education, sports, and recreation activities, acquire necessary social skills and attitudes, and improve your own health management, as well as enhance responsibility for and engagement in the healthy life of others.

References:
·*University Bulletin, 1953-1955* (ICU)
·*Course Offerings and Guide to Academic Regulations*, AY 1967-1971, 1985-1986 (ICU)
·*Some Thoughts on Recreation by Genzaburo Shirayama from Kosei-no-Nihon* No. 5, 1941 (Japan Recreation Association; May 1941)
·*Recreation by* MISUMI Tatsuo, IDE Education Selection Book 125 (Democratic Education Association, June 1968)
·*Studies on Tatsuo Misumi’s Philosophy of Recreation by* YATO Kazumasa *from Recreation Studies* No. 14 (Japan Society of Leisure and Recreation Studies, October 1985)
·*Roles of Recreation Workshops in Leadership Development by* TAKAHASI Shin et al. from Recreation Studies No. 28 (Japan Society for Leisure and Recreation, October 1993)
·*50 years of the Recreation Movement*(National Recreation Association of Japan, March 1998)
·*Holistic approach to KARADA by* MATSUOKA Nobuyuki; ICU General Education Series No. 36 (ICU Liberal Arts, May 2003)
·*The Recreation Movement in Wartime Japan: Focusing on the Japanese Recreation Conventions (1938–1940) by* TSUZUKU Makoto et al. *from Bulletin of Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba* No. 34, pp. 27-43 (Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, March 2011)
·The relationship between educational reform and recreation under the occupation by KATO Yukimasa et al. from Journal of Leisure and Recreation Studies No. 69, pp. 45-55 (National Recreation Association of Japan, March 2012)
·*PE at ICU* from ICU Archives Oral History 14: DVD (April 2022)
·*AY2016 Survey Report on Health and Physical Education at Universities and Colleges* (Japanese Association of University Physical Education and Sports, May 2018)

お邪魔します！　あのメジャー

第24回　日本研究　大川洋教授

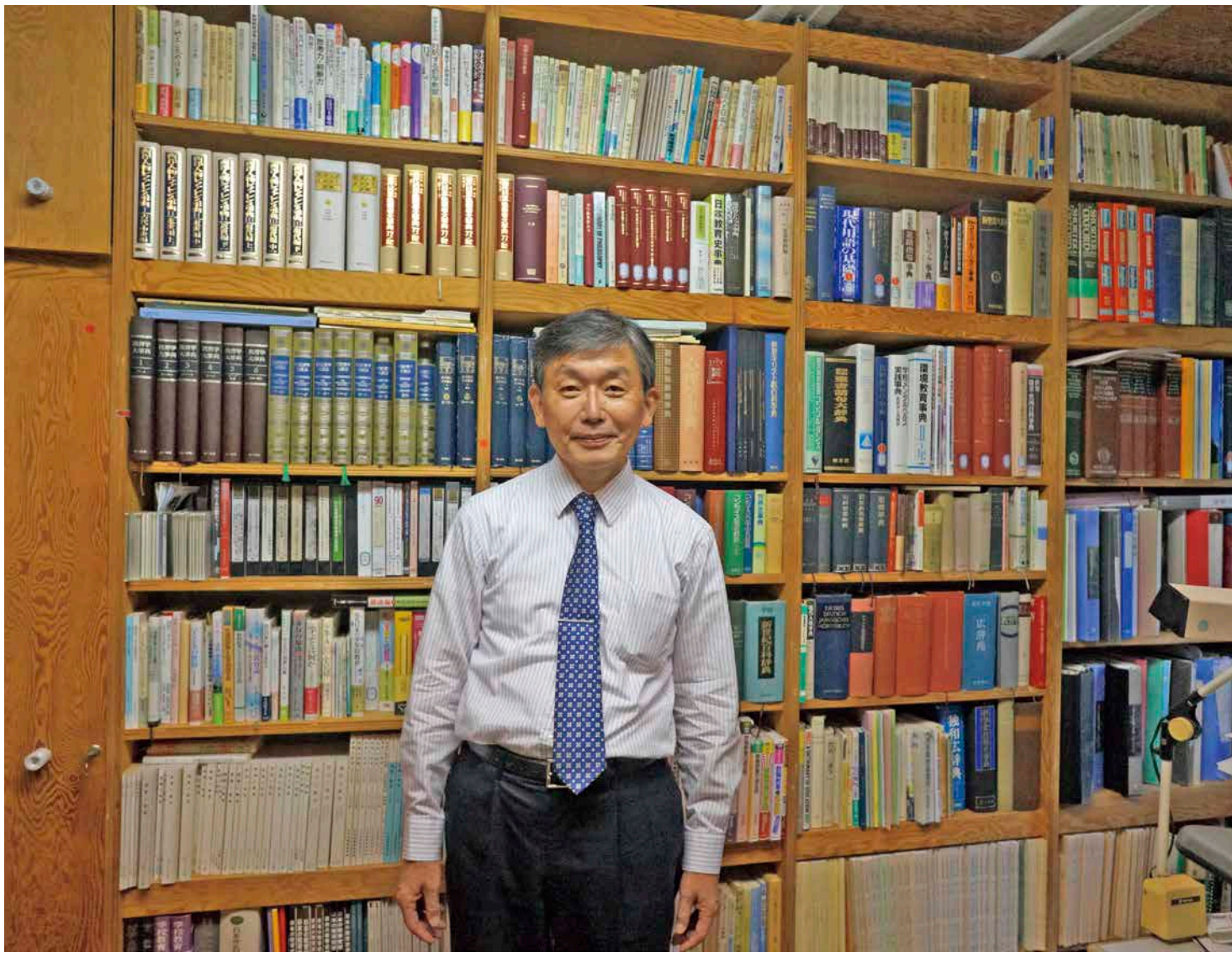
全31の中から気になるメジャーを紹介

**今回のメジャー紹介は、学際メジャーである日本研究を取り上げます。
日本について知ることは、どういうことにつながっていくのか、ICUだからこその日本研究とはどういったものか。
今回は大川洋教授にお話を伺いました。**

文・写真：谷澤聡（本誌）

OKAWA, Hiroshi

国際基督教大学　教授／早稲田大学卒業後、国際基督教大学大学院 教育学研究科修了。博士（教育学）。専門は教育哲学（主要テーマ：エラスムスの教育思想、キリスト教教育、道徳教育、自律のための教育）。早稲田大学（助手）、立教女学院短期大学、東京理科大学を経て、2014年よりICUに着任。著書には『いのちを育む教育学』『教育の原理』『西洋教育思想ー時代背景から読み解くー』などがある。



日本研究メジャーについて

日本研究というメジャーの一つの大きな特色として、さまざまなメジャーの科目が集まっている「学際メジャー」であるということが挙げられます。日本研究と聞くと、文化や美術、文学というイメージが先行するかもしれませんが、公共政策や教育、日本の社会や歴史、経済など、さまざまな視点から日本を知ることもまた日本研究です。

そしてICUの授業科目は、日本の文学や言語、歴史、社会、文化、教育など、実にさまざまな科目が日本研究と関連しています。たとえば「道徳教育の理論と実践」という授業は、教育学メジャーの科目でありますが、その一方で日本研究メジャーの科目でもあります。日本の道徳教育の歴史、日本の道徳の特色などを学ぶ際に、日本研究とも関わりが出てくるということです。このように、さまざまな科目との関わりを通じて「学際的な研究を目指す」ということが日本研究メジャーの目標として挙げられます。日本研究メジャーの魅力は、日本という研究対象をさまざまな研究領域から多面的・多角的に見ることを通して、さまざまな分野にわたる学際的認識を身につけることができる点にあります。

日本を知り、自分を知るということ

日本研究を通して、日本を多面的・多角的に知るということ、ものの見方や考え方を身につけるということが大切であると思っています。「汝自身を知れ」といいますが、「人間とは何か、私はいかなる存在か」という視点は、人間としての根源的な問いであり、大事なことです。日本を知ることを通して、人間を知り、自分を知る。そして深い人間認識や自己認識を得るということが強く期待されます。

ICUには留学生がたくさん来ています。彼らにとって、日本滞在期間中に日本を深く知るということは、とても重要な学修テーマです。そういう意味では、海外からの留学生が日本滞在中に良い経験ができるように配慮していくことも、日本研究メジャーの重要な使命だと思っています。私が今年度、責任者として担当する授業に「日本研究概論」があります。日本研究に関わる８名の教員がオムニバス形式で担当する授業となりましたが、日本を知る足がかりとなる科目であり、講義には海外からの留学生が多く参加しています。留学生にとっても、日本を知るということと、自分を知ることはつながっていくと考えています。

さらに言えば、日本を知ることで「現代日本にはさまざまな課題がある」ことも見えてきます。たとえば、ニートや引きこもりの問題、日本の子どもたちの自己評価が低いと言われる点などが課題として挙げられますが、社会の課題を知ることは、「どうしたら良いのか」という問題意識、課題意識につながることでもあります。社会の課題を知っていく中で、私はいかに生きるか、課題解決のためにどのような仕事をしてみたいかなど、使命感や責任感が育まれる教育を大学における学びの中で目指しています。そして大学で問いを発見し、探究していく中で、課題と向き合っていくための「心のエネルギー」をしっかり蓄えた上で、社会に出ていってほしいと願っています。

ICUで日本を学ぶ意義

ICUで日本を学ぶ意義として、ICUには海外の日本研究者が大勢集まっている点が挙げられます。たとえば学務副学長のエスキルドセン先生は日本近現代史を研究していますし、国際学術交流副学長のウィリアムズ先生は遠藤周作を研究しています。そういう方々が日本をどう見ているかという視点は、大変興味深いもので、そこにICUならではの特徴があると思います。

ICUがリベラルアーツの大学であるということも、日本研究には強みとなっています。ICUではさまざまな学問分野の先生が日本を研究しています。研究分野が異なれば、当然見方や考え方が変わってきます。さまざまな学問的なアプローチの方法に間近で触れられる点は、学生からすると非常に有意義な視点であると思います。英語開講の授業も多く、ICUは日本を研究するために海外から留学するのに最適の環境となっています。

今後の展望・メッセージ

日本研究メジャーの将来構想としては、海外在住の日本研究者がサバティカルの期間中にICUに滞在できるようにすることを考えています。ICUで日本での研究を遂行すると同時に大学の授業も担当してもらえれば、海外の日本研究を活性化させることになり、ICUにもプラスになるのではないでしょうか。ICUは、世界の中の日本研究の拠点となり得る大学です。そのような貢献ができるようになることを願っています。

日本研究のデータ

● 開講されている主な授業科目
（2022年度現在）

日本研究概論
日本史（古代・中世）Ⅰ
日本史（近世）Ⅱ
日本対外交流史
日本の宗教
道徳教育の理論と実践
比較の視点からみた日本の教育
外国語としての日本語教授法Ⅰ、Ⅱ
日本文学史Ⅰ
日本の音楽
日本美術Ⅰ、Ⅱ
日本の政治
日本の国際関係　など

From the Alumni House

アラムナイハウスから

ICU心理臨床家の集い総会報告

文：会長 川瀬正裕（23 ID79/G1981）

ICU心理臨床家の集いの総会が、さる2022年３月13日にOnlineで開催されました。この会は、ICUで学んだ卒業生・修了生で、心理臨床に携わっているメンバーで構成されており、ICUでの学びを土台にして、現在の課題なども共有しながら集っている会です。

毎年、多くはICUのキャンパスに集まって活動をしてきましたが、2020年２月に予定していた2019年度総会、次の2020年度総会がコロナ禍で開催することができませんでした。今回は久しぶりではありますが、Onlineでの開催となり、20人前後の会員が参加しました。

リアルに対面で会うことができず、歯がゆい思いもありましたが、一方でOnlineのメリットも体験することができました。それは画面上ではあってもマスクをはずして会うことができたことに加え、通常開催ですとなかなか参加しにくい長野、山口、沖縄など遠隔地のメンバーが参加してくれたことがあげられます。また、参加された皆さんもOnlineに慣れていらっしゃるようで、意外にも深まる話ができたことも収穫でした。そこでは、今取り組んでいる仕事のこと、コロナ禍での状況などから、さまざまなやりとりができ、結局予定をずいぶん超過して２時間半近くになりました。

さらに、今後の会のことについても話し合われ、新しい世代にも積極的に声をかけていこうという話になりました。関心がある方はぜひ、下記までご連絡をください。次年度はどうなっているのかわかりませんが、もし、集まれなくても開催はできるということが確認できましたので、前向きに準備を進めていきたいと思います。

ICU心理臨床家の集い事務局　ICUカウンセリングセンター内
phone: (0422)33-3499
email: icutsudoi@yahoo.co.jp

デンマーク支部会報告

文：高野文生（33 ID89）

2022年５月７日、デンマーク支部同窓会が開かれた。場所は高橋久美さん（30 ID86）のコペンハーゲンにある、実に素敵なご自宅である。

私はたまたまGW連休中に仕事の休みを取って英国はじめ欧州数カ国を巡る旅を計画中、デンマーク在住で部活動の先輩だった高橋さんにも会えないかと連絡を取ったところ、この集まりがあるので参加してはどうかと誘われた。当初の予定では参加は難しかったが、欧州事情について見聞を広めたいという旅の目的にあまりにぴったりのイベントだったので、仕事のやりくりをし、休暇を延長して参加することにした。

集まったのは、デンマークだけでなくスウェーデンの現役交換留学生も含め10人。手料理を持ち寄り、北欧に来たきっかけから、今何をされているか、順番に自己紹介。誰かの番が来るたびに話は盛り上がり、自己紹介だけで時間はあっという間に過ぎていった。「美味しいお食事と多彩な話題」（デンマーク支部幹事・小林香織さん、41 ID97）でICUの国際的人的ネットワークの恩恵に浴し、私の旅もおかげで充実したものとなった。

同窓会新グッズに「超撥水風呂敷」誕生!

文：伊能美和子（31 ID87）

大小２つの柄で「超撥水」の風呂敷を作りました。デザインをしてくださったのは同窓生の中村麻衣子さん（47 ID03）です。大は、96cm角、懐かしい風景や新たな建物が描かれた「オリジナルキャンパスマップ」。気持ちも明るくなるような鮮やかなカラーリングにしていただきました。

小は、70cm角、建築家のヴォーリスの手による歴史的な価値も高い「ICUの構図」。シックで落ち着いた色合いに、すっきりとした白の図面が際立ちます。

通常の風呂敷としての活用はもちろん、バッグに忍ばせておけば、結んで汎用性の高いエコバッグとして使えるほか、急な雨の時の防水カバーとして、傘やレインコート代わりにもなります。万が一の時には、バケツのように、水も運べる優れものですので、防災リュックに入れておくのはいかがでしょうか？　そのまま壁にかけて、タペストリーにしても、見応え十分なクオリティです。

高機能で、場所も取りませんので、ぜひ２枚セットでお手元に置いてください。プレゼントにもぴったり…。

結び方などは、昨今ネットにもたくさん紹介されていますので、ほかのICUグッズをこの風呂敷に包んで差し上げる、というのも、喜ばれること間違いなしです。

価格は、キャンパスマップ柄（96㎝角）は5000円（税込）、ヴォーリスの「ICUの構図」柄（70㎝角）は3500円（税込）です。ご購入ご希望の方は、同窓会事務局（aaoffice@icualumni.com）まで、ご希望の商品名、枚数、ご名前、送付先ご住所、お電話番号をお知らせください。追って代金と送料のお振込み銀行口座をお知らせいたします。ICUアラムナイショップ（https://shop.icualumni.com）でもお買い求めいただけます。

松本中央法律事務所
Matsumoto Central Law Office

弁護士　松本　典子
（ID01・45 期・理学科生物学専攻卒業）
懇切丁寧に対応いたします。
お気軽にお問い合わせください。

全国からＺＯＯＭ・電話相談対応

TEL 03-5776-2435　東京都中央区日本橋小網町８－２
WEB https://www.m-laws.jp　E-mail: n.matsu@m-law.jp

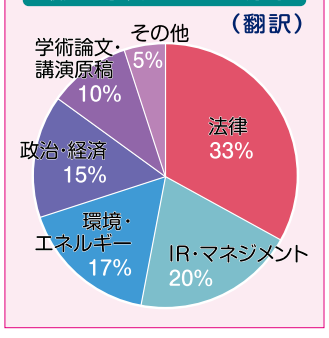
取扱分野：企業法務一般・契約締結交渉・離婚・男女問題・遺言
相続・環境問題・労働問題・債務整理・刑事弁護など

翻訳・通訳
料金表等資料をお送りします。
電話、メールでご請求ください。

34年の経験と実績
300名近くのICU同窓生の皆さまにご利用いただいてきました。

●翻訳：IR資料、契約書、論文、講演原稿など
●通訳：会議、セミナー、商談、会見など　※オンライン通訳も可能
▶英語、仏語、独語、西語、露語、中国語、韓国語、ベトナム語
その他アジア言語　●トライアル翻訳（無料）も承ります。

最近お手伝いした主な分野（翻訳）



●ICU同窓生10％割引
翻訳・通訳・制作（デザイン・印刷）
☎03-3431-2118
URL：http://www.exim-int.com/
（株）エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.
President 永島 克彦（14期）
Advisor 比奈地 康晴（14期）

（2022年4月）

東京事務所 〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 ゼネラルビル3F
TEL 03-3431-2118　FAX 03-3431-2120
E-mail：tokyo@exim-int.com

横浜事務所 〒232-0063 横浜市南区中里2-14-5
TEL 045-721-4800　FAX 045-721-5165
E-mail：yokohama@exim-int.com

寄付者御芳名　Donors

齋藤顕一（17）
滝澤美佐子（G1987/G1989）
株式会社 Surface & Architecture
貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。

たずね人　Missing

池田英人（35 ID91）
深見淳（43 ID99）
田中智己（49 ID05）
小山英恵（55 ID11）
市村脩一郎（57 ID13）
木内萌乃（61 ID17）
野邊大樹（61 ID17）
鳴島歳紀（63 ID19）
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報　Obituary

原一雄ICU名誉教授
石川光男ICU名誉教授
中野照海ICU名誉教授
古藤友子元ICU教授
轟玲子元ICU職員
松代晃（1）
河田達郎（2）
内藤順敬（2）
石川康昭（3）
中田貞夫（3）
白鳥靖（3）
筆宝紀美子（4）
湯浅隆司（4）
紙名洋一（5）
早川嘉春（5）
上矢瑛子（5）
樋口順子（6）
小西三郎（6）
佐柳文男（8）
小高正光（10）
田村靖子（11）
安江明夫（13）
堀江保範（14）
PAGE（大平）和子（35 ID91）
心よりお悔やみ申し上げます。

事務局からのお知らせ

★ 広告募集！

本誌では広告を募集しています。フルサイズ６万円、ハーフサイズ３万円で承っております。ご興味のある方は、詳細を事務局までお問合せください

★ 原稿をお寄せください！

期会、リユニオンなどの案内・報告をお寄せください。本誌およびWeb サイトに掲載いたします。

★住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際はメールまたは同窓会のWebサイトの住所変更から、ご一報ください。
aaoffice@icualumni.com
地方･海外にご転勤の際には支部をご紹介いたします。同窓会事務局までお問合せください。 携帯の方はこちらからどうぞ：

★ ご協力をお願いします

大学の宣伝＝大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

メールアドレス登録・更新キャンペーン実施中

メールアドレス登録・更新キャンペーン実施中
ICU同窓会では、会員向けメールマガジンによる情報発信を計画しています。
同窓会にメールアドレスが登録されていない（と思われる）、使っていない古いアドレスが登録されている（気がする）みなさん、この機会にあらためて最新のメールアドレスをお知らせください。
同窓会の会員データベースに登録し、同窓会からのお知らせやメルマガなどをお届けいたします!

登録はこちらのフォームからお願いします。
https://forms.gle/6Ex5C9uGU3CFCeDX9

アラムナイニュースWeb版配信のお申込について

アラムナイニュースWEB版の配信をご希望の方は、下記フォームへご連絡ください。
郵送でのお届けからメール配信に切り替えさせていただきます。
こちらからお手続きください
→https://forms.gle/gUZ3YzXb3QpGpPMt6
QRコードはこちら→

ICU祭の日の同窓会企画につきまして

文：総務部担当副会長　吉澤洋（33 ID89/G1991）

2022年10月9日（日）と10日（祝）の2日間、ICU 祭が開催されます。コロナ渦以前にアラムナイハウス2階のアラムナイラウンジにて開催されていた同窓会企画、アラムナイカフェ・グッズ販売につきましては、昨今の情勢を鑑み、大変残念ながら今年も開店を見送ることとなりました。来年以降、ラウンジで旧交をあたためられることを期待いたします。

DAY賞候補者をご推薦ください

Distinguished Alumni of the Year（DAY）賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方（卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外）の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

※推薦は年間を通して受け付けておりますが、前年10月15日受け付分までを選考対象として翌年の桜祭りで受賞者を表彰します。
※受賞者は同窓会Webサイトで発表するとともに、アラムナイニュースでお知らせいたします。
※推薦および選考については公開されません。
※自薦・他薦を問いません。
※推薦方法　　WebフォームからもDAY賞候補者推薦ができるようになりました！
https://www.icualumni.com/activities/day/
Webサイト の「DAY賞」のページから［推薦フォーム］に、あるいは［推薦用紙PDF］をダウンロードして、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてにお送りください。
郵送/FaxまたはE-mailで受け付けております。
※必要事項
・推薦したい方の氏名と卒業年、あるいは在籍年（分かる範囲で）
・推薦理由（新聞記事などの客観的資料があれば併せてお送りください）
・あなた（推薦者）の氏名と卒業年
・あなた（推薦者）の住所・Tel.・E-mailアドレス
※歴代受賞者名もWebサイトに掲載しております。

ICU同窓会事務局
〒181-8585東京都三鷹市大沢3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320
E-mail：aaoffice@icualumni.com

STAFF

EDITOR IN CHIEF
新村敏雄　SHINMURA, Toshio（27 ID83）

MANAGING EDITOR
松田真理子　MATSUDA, Mariko（38 ID94）

EDITORS
鈴木 律　SUZUKI, Ritsu（23 ID79）
望月厚志　MOCHIZUKI, Atsushi（26 ID82）
長谷川由紀　HASEGAWA, Yuki（32 ID88）
太田順子　OTA, Junko（35 ID91）
安楽由紀子　ANRAKU, Yukiko（40 ID96）
谷澤 聡　TANIZAWA, Satoshi（54 ID10）
川島美菜　KAWASHIMA, Mina（58 ID14）
滝沢貴大　TAKIZAWA, Takahiro（62 ID18）
DELFS, Benjamin G.（OYR 2012）

PHOTOGRAPHER
八藤まなみ　YATSUFUJI, Manami（45 ID01）

ART DIRECTOR
佐野久美子　SANO, Kumiko（44 ID00）

PRINTING DIRECTOR
坂井健　SAKAI, Takeshi（小宮山印刷）

EXECUTIVE DIRECTOR
池島広子　IKESHIMA, Hiroko（27 ID83）

PUBLISHER
廣岡敏行　HIROOKA, Toshiyuki（31 ID87）

cover photo: 大間哲　OOMA, Tetsu（34 ID90）
backcover photo: 同上

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみなさまのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか？企画、取材、執筆、撮影、編集進行等を一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいやれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

■大学・同窓会に関する情報が満載です。
ぜひ一度ご覧ください。
同窓会Webサイト
https://www.icualumni.com/
同窓会 Facebook
https://www.facebook.com/icualumniassociation
大学 Web サイト　https://www.icu.ac.jp/
JICUFWeb サイト　https://www.jicuf.org/

■ ICU 同窓会事務局
〒 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320
Email：aaoffice@icualumni.com